地下迷宮の女神

林来栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地下迷宮の女神

【Ｎコード】
Ｎ８３５３Ｖ

【作者名】
林来栖

【あらすじ】
故国ランダスのお家騒動を回避するために、半ば強制的旅に出されたジェイスと、従者で親友女傭兵シェイラ。二人は故国とは大陸の真反対になる南国ロンダヌスの、絶対神ウォームの神殿で、自称宮廷魔導師の絶世の美丈夫クレメントと出会う。それと同時に、３００年前の七賢者の一人アルクスク大神官の魔法石が盗まれるところにも居合わせ、なんと犯人にされてしまう。
身の潔白を晴らすため、ジェイスはシェイラ、クレメントと共に、魔法石泥棒の追跡を始めるのだが……

1（前書き）

この小説の舞台設定は、作者単行本「僕の魔法使い」と同じです。
ただ、時代が違いまして、キャラクターも違います。
「僕の魔法使い」をお読みでない方にも、設定内容は分かるように書いておりますので、どうぞお楽しみください。

なお、残酷シーンというより、ハチャメチャな戦闘シーンが、後半戦に出て参りますので、苦手な方は、考慮の上、お読み下さい。

1

パンドール大陸では、神々の王にして絶対神と呼ばれるウォームが、臣下の神を大陸各地に遣わしそれぞれの国の祖とした月を、一年の初月と定めていた。

俗に『夏節祭』と呼ばれる祭は、初月の一日から一週間、各国の王家始祖の神の神殿が個々のしきたりにのっとって執り行う。どの神殿の祭もそれなりに華やかではあるが、何と言っても大陸一の大国、ロンダヌスにあるウォーム神殿の祭が一番、盛大だった。

ウォームはロンダヌスの始祖の神ではない。古代カスタ王国から連なるこの国の王家は、絶対神の腹心として信頼されたトール・アルフル（高位妖精族）の王を祖とする。

妖精の王はウォームに敬意を込め、この地に彼の神の神殿を建てたと言われている。

王都ロレーヌの中央広場から西へ向かうと、白いガレリア石を積み上げた、荘厳なウォーム神殿に突き当たる。門前通りとなる西大通りは、夏節祭の間中通りの店の他に屋台が並び、大賑わいとなる。

飾り付けのための造花や生花を売る店、菓子や酒のつまみのような食べ物の店、遠方からの珍しい品々を並べる店もある。

また、大門を潜った礼拝堂入り口前の広場には見せ物小屋が並び、小屋の前には客寄せの口上師、大道芸人が衆目を集めている。

個々の民家の窓辺や玄関に飾り付けられた南国特有の色鮮やかな花々、景気のいい呼び声などに祭気分を刺激された人達が、路地をはしゃぎながら歩く。

昼過ぎ。

ロンダヌス中からやって来た観光客や、ウォームの信者の歓声に埋まる街路から神殿内へ一歩入ると、だがそこは別世界のように静

かだった。
新年の護符が配られる午前中には信者が大勢礼拝堂へ入るが、午後には閑散とするのが夏節祭時の神殿の風景である。
それは、どの神の神殿もあまり変わらなかった。
それでも人影がちらほらとある広い礼拝堂の祭壇前に、一際目を引く男女二人が立っていた。
どちらもかなり大柄である。男の方は、肩幅が広く手足が長い。筋肉もがっちりついた身体付きだが、筋肉隆々の巨漢、という程ではない。
使い込まれた革の胸当てに、背には太い革ベルトで吊った大剣を背負っているところから、どこかの国の剣士か傭兵とみられる。
年は二十代半ば頃、背の中程まで伸ばした、印象的な赤茶の髪を黒い組み紐でひとつに結んでいる。
女は、長身の連れより頭ひとつ半程低く、女性としては上背がある。
腰には小剣が二本、革ベルトに吊るされている。
女剣士である。
胸は豊かで、腰は蜜蜂のように見事にくびれているが、革の胴着の上からでも、鍛え抜かれた身体であるのが分かる。
女は、男好きする、肉感的でややきつめの美貌を上向け、肩に付くか付かないかで切った癖の強い黒髪を軽く振った。
「あれが『祝福』の魔法石よ。知ってると思うけど、三百年前古代カスタ王国跡を冒険した七賢者の一人アンダレート・アルクスク大神官が持っていらしたものよ。魔法石は現在この大陸に七つ存在するわ。と言うのも、元々ひとつの石だったのをやはり七賢者の一人の闇の賢者と呼ばれるエレクトラ・ラ・ニル
が魔法で七つに割ったのよ」
顔立ちに似合ったアルトに、男は「ふーん」と生返事をする。
彼女の、綺麗に切れ上がった濃い茶の目が、きっ、と相手の顔を睨んだ。

1（後書き）

「当分連載はやらない」と言っておきながら・・・
やっぱり書いてしまいました（汗）

下手の横好きなんでしょうが、小説を書くのが、作者どうやら好きなようです（小説家になろう！に投稿している以上、当たり前ですが）

このお話も、以前に書いたものの書き直しです。結構長いし、直しも満載なので、アップの時間も掛かるかも知れませんが、よろしかったらお付き合いください。

前書きにも書きましたが、この物語は「僕の魔法使い」の、時代をかなり下った、同じ世界設定の物語です。一部「僕の魔法使い」の登場人物の名前なども出て来ますが、前のお話を読まなくても分かるように書いてあります（の、つもりです）

2

「ちょっとっ、真面目に聞いてる？　ジェイスっ」
「聞いてるって。あー……、で、あれ何だ？シェイラ」
祭壇正面を指さし、間の抜けた声を出したジェイスに、シェイラは鼻を鳴らした。
「なあによっ！　全く人の話を聞いてないじゃないっ！」
「いや、悪い。ちょっと他のこと考えてて」
ジェイスは、強張った笑いを貼付けた頬を、人さし指でぽりぽりと掻く。
「ったくもうっ、剣にばっかり夢中になって歴史の師匠の授業をろくすっぽ聞いてなかったって言うから、教えてあげればっ！　やっぱり興味のない話は、右から左なんだからっ！」
腰に手を当て捲し立てる相手に、長身の偉丈夫はたじたじとなりながら顔の前で手を合わせ謝る。
「わぁるかったって。??で、あれなんだ？」
ジェイスはもう一度祭壇の奥を指した。
通常、大陸の神殿の祭壇の作りは、神官らが上がる段を一番下として、その奥に供え物の台、神殿の主神の旗色と紋様を彫り込んだ木造の彫刻の順になる。
一番奥は、明かり取りの絵ガラスを嵌め込んだ出窓である。
しかし、ウォーム神殿の祭壇の奥には、他の神殿には無いものがあった。
小さな透かし彫りの箱の乗った、足の高い台座である。台座は、供物の台と紋様の彫刻との間に置かれていて、その上には小さな白い木箱がひとつ、乗っていた。
木箱の四方の面はが精緻な透かし彫りで葡萄の模様が描かれている。葡萄の葉と実の間の隙間から、淡い卵色の光が漏れていた。
祭壇上部の、天窓と左右のステンドグラスの窓から入る陽光だけ

が光源の仄暗い堂内で、木箱の中からの光は、見る者に小さな安らぎを与えてくれる。
木箱を指差したジェイスに、シェイラは思い切り顰め面を作る。
「だからっ、あれが魔法石よっ」
「あれが？　あんなに光ってるもんなのか？」
「そうよ。『『祝福』の石は淡き光の宝石』って、かの有名な吟遊詩人のオーガスタが詠ってるじゃない」
「そーだっけ」
ジェイスは、赤茶の頭を右に傾けた。
「けど、あんな箱の中に入ってっと、大きさは全くわかんねえなあ」
「確か、親指の頭くらいの大きさって、聞いたことがあるわ」
「そんなにちっこいのか？　手の中に入っちまうなぁそれじゃ。ランダスのはもうちっとでかかったぜ」
「そのようね」シェイラは苦笑した。
ジェイスは、ランダス生まれのランダス育ち。傭兵として各地を旅したシェイラと違い、現在は任を解かれたが、騎士としてランダス王国に27年仕えていた、バリバリの武人である。
先のやり取りでも明白なように、ジェイスが、性格的にも興味がない歴史上の文物、特に他国の文物についてよく知らないのは、もうどうしようもない。
「ランダスに伝わるものは、七つに割った石の中で一番大きいそうだから。??ジェイスは、見たことあるんでしょ？」
「ああ??まあな」
ジェイスは、内戦の時と戴冠式の折に見た、王の帯剣につけられている、純白に輝く魔法石を思い出した。
ランダス王家には、当時七賢者と共に旅をしたフィルバード王によって魔法石の一つが伝えられている。
石は、フィルバード王が、本国に帰った後に作り直したという、王の大剣セプティリアの柄の元の部分に、竜を模した見事な金属細工によって嵌め込まれていた。

魔法使いでもなければ使えない石を、何故王が持つ事になったのかは、ランダスの史書にも記されていない。

ランダス王の大剣に話が及び、ジェイスは故国の風景に、ふと、思いを馳せた。

3

北国のランダスは冬が長い。寒さも厳しく、最北部では凍死者すら出る。海も河も凍り付き、陸は降り積もる雪で、森も村々も埋もれる。

そんな厳しい気候の国だが、短い春から秋の間には、あらゆる花が一遍に咲き、たちまち緑が萌え出す。

その、スピーディで美しい移り変わりは、正に生命の力強さをランダスの国人に教えてくれる。

ロンダヌスのように南国の華やかさは無いが、素朴な美しい国、それがランダスだと、ジェイスは南までの旅をしてみてつくづくそう思うようになった。

束の間、故国を思い出してぼんやりしていた彼に、シェイラが淡い笑みと共に尋ねた。

「帰りたい？」

「？？いや」

ジェイスは苦笑しながら、首を振った。

「帰る気は、まだねえよ。？？まだ戻れっこないし」

「そうね……、連中、手ぐすね引いて待ってるでしょうしね」

笑みを留めながらも、シェイラは、旅の間中忘れかけていた苦い思いが、再び込み上げてくるのを、感じていた。

数多いるランダスの騎士の中でも、ジェイスは、国外でさえ知らぬ者がいない程の、有名な騎士である。

二年前の内戦では目覚ましい功績を上げ、現国王から伯爵位まで賜った。

本来なら、ジェイスは故国にあって摂政である兄の仕事を手伝わなければならない立場なのだが、それが放浪の剣士となり大陸の真反対の国まで旅して来たのには、ランダスの国内事情と深く関わりがある。

あの時。
ジェイスの腹違いの兄で、宰相のカーライズ公から一刻も早く国を出ろと言われたあの時、ジェイスは文句も言わず兄の言に従った。
彼が悪いのではないのに、と、従者としてカーライズ公の館へ同道したシェイラは反発した。
悪いのは、ジェイスを旗頭にして再び内乱を起こそうと企てている連中だ。
だが、彼女の言葉を加勢に反論するでもなく、黙って兄カーライズ公の館を後にするジェイスに、結局シェイラもそれ以上言い立ても出来ず従った。
今でも、ジェイスが追放同然で国を出なければならなかったのには、シェイラは従者としても、友としても納得していない。
が、当のジェイスがそれでよしとしている以上、戻ってもう一度文句を言う訳にもいかない。
よく言えばお人好し、悪く言えば立ち回り方が下手なジェイスに呆れながら、それでもシェイラはこの男から離れる気にはなれない。
男として好いている訳ではない。
多分、出来の悪い弟を放っておけない姉の心境なんだろうと、自分では分析していた。
「それにしても」
その『不器用な弟』が、故国から話題を魔法石に戻した。
「危なくねえのかなあ。あんな、囲いも無い台座の上にちょこんと乗せて。ロープったってこんなん、外そうと思えば簡単じゃんか」
祭壇の前には、侵入禁止の意に赤いロープが、二本のポールの間に渡すように張られている。
しかしそれ以外、見張りの神官も兵士もいない。
「壇上に上がったら、俺だと台の上に手が届くぜ？」
確かに、台座の足はかなり高く、下から二メートル以上はある。
が、祭壇を踏み台にすれば、背の高いジェイスなら苦も無く小箱に手が届く。

あまりな不用心さに、シェイラも少し呆れつつ、顎に拳を当てた。
「そうね……、盗人がちょっと背のある奴なら簡単ね」
「でも、実際には無理ですよ？」
不意に背後から声がして、二人は驚いて振り向いた。

4

彼等の話に割り込んで来たのは、にこやかな笑顔を浮かべた若者だった。

年齢は二十歳くらいか。ジェイスより頭半分程低いくらいなので、長身の部類である。

両肩から胸元まで細い金糸の刺繍を施した、木の葉模様の透かしの入った夏物の絹の白い長衣を、優雅に纏っている。着衣の良さと身ごなしから見て、貴族か大きな商家の子息であろう。

だが、ジェイスの目を最も引き付けたのは、彼の服装ではなく容姿だった。

肩まで伸ばした髪は若緑色、笑みに細められた瞳は銀という特殊な色彩の上に、長身の割に細身の身体の上に乗った顔は、絶世の美女としか思えぬ美貌である。

ロンダヌスの王家の始祖は、トール・アルフルの王である。長く続く王家の例に漏れず、古代カスタ王国から続くロンダヌス王家の血筋は、王族貴族のみならず、豪商や庶民にまで広がっている。

トール・アルフルには、眼前の若者のような、人間とは色彩の全く異なる者も多くいる、と聞く。また、飛び抜けて繊細な美貌も、トール・アルフルの特徴であるらしい。

らしい、というのは、トール・アルフルとその血を継ぐ人間は、このパンドール大陸では2ヶ国にしか居住していないからである。当然ながら、ランダスでトール・アルフルを見掛ける事は、一切無い。

しかし、聞くと見るでは大違いだ。

息を呑む程の美しさが、正に目の前に存在している。

あんぐりと口を開けてしまったジェイスと、同じく声もなく若者を見詰めているシェイラに、若者は微笑を苦笑に変えた。

「すみません、驚かせました？」

「あー……、いや」
声音は間違いなく、柔らかな男声である。にも関わらず、ジェイスは不覚にも顔が赤らんだ。
どうして自分が、男（だと思われる相手）に、ときめきを覚えるのか？
もしかして、眼前の美形は本当は女性なのか？
確かめるべく、ジェイスは若者の顔に、ずいっ、と自分の顔を近付けてみた。
若者は、驚いて逃げる風もなく、笑みのままの銀の瞳に、ジェイスを映している。
微かに、甘い花の香りが、若者の身体から香っている。
「あんた……、本当に男か？」
「ジェイスっ！」
不躾な態度と質問に、シェイラが怒鳴る。が当の若者は嫌な顔をするどころか、にっこり笑顔を更に深めた。
「ええ、一応」
「ごめんなさいっ、不作法な人で」
「いえ。よく聞かれますもんで、今更気にもなりませんので。けど、質問される方の大半は『男です』の答えにがっかりした顔をされます」
「だよなあ。男ならそうだよな」
「もうっ。本当にごめんなさい、名乗りもしないで。あたしはシェイラ、こっちはジェイス。ランダスから来たの」
「僕はクレメントです」
「失礼だけど、ご身分は？　もしかして貴族のご子息かしら？」
容姿からすれば、間違いない。トール・アルフルの特徴は、貴族に出易いらしい。
「いえ……。通りすがりの放蕩者です」
が、クレメントは、シェイラの問いに曖昧に答えた。
シェイラとの話の間中、じっとクレメントを見ていたジェイスは、

相手が笑顔のままだが目が笑っていないのに気付いた。
何か隠している。
だが、問い詰めても白状するような相手ではなさそうだと思い、この場ではこれ以上追求しないと決める。
ジェイスの人間観察眼は、案外と的を射ている。
というのを、付き合いの長いシェイラはよく知っている。
ジェイスが黙っているのを、相手を探っているからと察知したシェイラは、クレメントの身上から、話を切り替えた。

5

「ところで、さっき言ってた、魔法石を盗むのは無理っていうのは何故なの？」
「ああ、それはですね、あの小箱には帰還の呪文が掛かっているんですよ」
「帰還の呪文？」
魔法は使えないので、当然ながら聞き覚えのない言葉に、ジェイスは首を捻る。隣でシェイラは「ああ」と手を打った。
「大切なものに掛けておけば、盗まれたり何処かに置き忘れたりしても、その品は必ず手もとに帰って来るっていう魔法よ。？？っと、それを知ってるって事は、あなた、魔導師？」
「まあ、端くれではあります」
短く答えたクレメントに、シェイラはふうん、と、うさん臭げな顔で頷いた。
「でも、帰還の呪文は、古代語魔法でも中級で、現在の魔導師で呪文を使える人は少ないって話だけど？」
表情と、語尾が強くなるシェイラの口調に、ジェイスは、彼女もクレメントを曲者と睨んでいるらしいと分かった。
「そうですね。過去、多くの強い魔力を持った魔導師を排出したロンダヌスでも、古代語魔法を使いこなせる魔導師は、もう幾人もいません。
この小箱に帰還の呪文を掛けたのは、七賢者のケイト・クリスグロフだと聞いています。ケイトの他に、アルクスク大神官が神聖魔法の選別の呪文も掛けているそうで、魔力の無い者、また神聖魔法が使えない者が蓋を開けようとしても、開けられません」
「……本当に詳しいのね」
あからさまに疑いの響きを含ませたシェイラの相槌に、クレメントは、だが、しれっとした表情で答えた。

「ロンダヌスの王宮図書館には、以上のような伝記の書物が、山とありますから」
「って事は、あんた、宮廷魔導師か？」
ジェイスの質問に、クレメントは一瞬、銀の美しい瞳を見開いた。が、すぐに作り笑いに戻した。
「ええ……、そんなところです」
この美しい若者が泣く様子は、どんなにか甘く切ないだろう、という余計で不埒な思いが、瞬間ジェイスの頭に浮かぶ。
男色の素養は、自分には決してない、とジェイスは思っている。だのに。
降って湧いた自分の妄想に狼狽えて、ジェイスは思わず、焦げ茶の瞳を天井に向ける。
「あー、と」
「なに、変な声出してるの？」
シェイラに聞き咎められた直後、正面入り口がどやどやと騒がしくなった。
両開きの白い木製の扉が大きく開かれ、三十人程の人間が堂内へと入って来た。
地方からやって来たウォーム信者のようだった。老若男女混ざっているが、皆揃いの白木の杖を持ち、やはり揃いの生成りの七分丈袖の上着を着ている。
先頭の、中年の地方神官が、ドーム型の礼拝堂一杯に響くどら声で、一同に指示を出した。
「はいっ、正面祭壇に参りますっ！　列を作り順序良く進みましょうっ！」
信者達は楽しげにしゃべりながら、ずんずんと三列横隊で祭壇に進んで来た。
「はいっ、先の方、ちょっと申し訳ありませんが、我々にも礼拝させて頂けませんかっ？」
人の列と、神官のどら声に圧倒されて、ジェイス達は場所を明け

渡した。
右の壁側へ移動しながら、ジェイスは、ふと、一団の最後尾に目が行った。

6

背の高い人物だった。周囲から頭一つ半は、飛び出している。他の信者とは違い、灰緑色の綿ものの外套を着ている。外套のフードをすっぽりと被っており、全く顔が見えない。

長い外套は、その他の身体の部位も全て覆い隠している。が、背丈と肩幅から察するに男であろう。

それにしても、南国ロンダヌスの初夏に、薄絹ではない外套のフードを被っているのは、相当暑い筈だ。

礼拝堂は明かり取りの窓の他に、空調の穴が幾つかあり、空気が常に出入りしている。そのせいでさほど暑くはないが、それにしても、あれはやり過ぎではないか？

ジェイスが男を見ていたのに気が付いたシェイラが、そっと頭を寄せて来た。

「一番後ろの人？　随分背が高いわね。……でも、初夏のロンダヌスにフード付き外套なんて、怪し過ぎよね」

「そう、思うよな」

男は、背の割に身体に厚みが無さそうだった。

剣士や騎士なら、重い鎧を着込む上、剣を常に持ち歩くため、嫌でも筋肉がつく。

外套の動きから察するに、どうもそういった鍛錬をしているようではない。

何者なのだろうか、とジェイスが眉間を寄せた時。

「？？の魔導師……」

「え？」

クレメントが深刻な声で呟いた。ただならぬ様子を感じて振り向いたジェイスは、先程の笑顔とは打って変わった真剣な美貌に、どきん、と鼓動が跳ね上がる。

「なん？？」

またも起こった妙なときめきを何とか抑え、聞き取れなかった言葉を問おうとした声は、だが、突然の叫び声に掻き消された。
叫んだのは、団体の前列の信者達だった。
「魔法石がっ！」
「小箱が宙に……っ！」
ジェイスとシェイラ、それにクレメントは、弾かれたように祭壇を見た。
「ジェイスっ、小箱がっ！」
シェイラが驚いて指差した先で、先程台座の上にきちんと乗っていた魔法石の箱が、台を離れ、ふわり、と浮いていた。
ジェイスは祭壇へ行こうと動き掛けた。
「お待ちなさい」
クレメントが、彼の腕を掴んで止める。直後、小箱がぱんっ、と軽い音を立てて割れた。
透かし彫りが美しい箱は、見るも無惨に砕け、細かい破片となって落下する。
再び、団体から悲鳴が上がる。
最初の騒ぎを聞き付けた、神殿の外回りを守っていた衛兵が数人、入って来た。
「何事だっ」
兵士長らしい男が、団体の責任者である神官に歩み寄る。
神官は震えながら、しどろもどろに答えた。
「こっ、小箱が浮いて……、割れて……」
「何だ？」
訳が分からず兵士長が聞き返した時、隣に並んだ兵士が声を張り上げた。
「兵士長っ！　魔法石が浮いておりますっ！」
兵士長が祭壇を見る。ジェイスも、釣られてそちらを向いた。と、台座の四、五十センチ程上に、大人の男の親指の先程の石が浮いていた。

砕けた外側と共に落ちなかった魔法石は、先刻、箱の中から発していた淡い卵色ではなく、赤く禍々しい色の光を放っている。
「なんで……？」
ジェイスとシェイラは、異口同音に言った。
魔法石は唖然と見詰める人々の眼前で、きらりと強い光を放つと、次の瞬間、こつ然と消えた。
一泊置いて。
兵士達も含め、居合わせた人の大半が、大恐慌に陥った。
教典を読み上げる神官の声がよく響くように設計されている礼拝堂は、人々の阿鼻叫喚を増幅する。

7

大反響する悲鳴を聞き付け、神官達が奥殿から出て来た。
「どうしましたかっ？」
白地に、ウォーム神の象徴植物である百合を前面に刺繍した夏用の外衣を纏った、１２、３人の神官の中程にいた一人が、兵士長に尋ねた。
「あっ、神官長殿っ！　一大事ですっ、魔法石が消えましたっ！」
「なんとっ？！」
神官長が祭壇を振り返る。そこにある筈の小箱が無いのに、神官長の細長い顔が、みるみる驚愕の表情になった。
「一体、どうしたのですかっ！」
他の神官達も一斉に祭壇に駆け寄る。
信者達を掻き分けて祭壇へ集まる神官達の様を他所に、クレメントが不意に入り口へ駆け出した。
「おい、どうしたんだ？」
後を追ったジェイスは、半分開いた扉から外を睨んだ若者が、吐き捨てるように呟くのを聞いた。
「逃げられた……」
「って、誰に？」
ジェイスが追って来ていたのに気が付いていなかったらしいクレメントは、背後から尋ねられて、驚いた顔で振り向いた。
「あ、ええ……。さっきの長身の男です」
「フード被った？」
「はい」
「なあに？　どうしたのよ？」
小走りに寄って来たシェイラが、不審げに眉を寄せる。
「さっきのフード野郎が消えた」
「えっ？　じゃもしかして？？？」

「おいっ、そこの三人、何をこそこそやっているっ？」
ジェイス達に気付いた兵士長が、居丈高な態度で詰問する。
神殿警護の兵士に限らず、他国の兵士とやり合うのは、現在のジェイスの立場を考えれば、利口ではない。
ジェイスは、作り笑いを浮かべた。
「ああ、えーと、誰か出てったみたいだなーと」
「何だとっ？」
兵士長はジェイスの大柄な身体を押し退け、外を見た。礼拝堂の扉の外側には、急に警護の兵が中へ入ったのに驚いた祭の見物客達が、集まって来ていた。
興味津々で大階段を上ろうとするやじ馬は、必死に止める兵士達に口々に文句を言っている。
そんな状況で兵士長が顔を出したので、やじ馬が一斉に中がどうなっているのかと喚き出した。
わんわんと、まるで犬が吠えているかのような大勢の質問に驚いて、兵士長は慌てて扉を閉めた。
「……誰も出て行った様子は無いっ」
兵士長は、じろり、と三人を睨付ける。
「もしかして貴様ら、自分達の犯行を隠すためにでたらめを言ったな？」
これは、弁解しても、何のかの理由をつけて引っ張られるな、と判断したシェイラは、喧嘩覚悟で見当違いもいいところの相手に啖呵を切った。
「馬鹿言わないでよっ。私達が盗人だっての？　だったらこんなとこに何時までもぐずぐずいないわよっ」
「むむむっ、その反抗的な態度っ。ますます怪しいっ！」
「何寝ぼけてんのよっ、このおっさんはっ！」
「何だとっ？」
「どうしたのです？」
神官長が、こちらへやって来た。

「神官長殿っ、こやつらがどうやら盗人のようですっ！」
神官長は、ジェイス達三人を見ると「あっ」と短く叫んだ。
「あ、あなたは？？」
クレメントに対して神官長が何か言い掛けたその時、祭壇前の団体の中から声がした。
「その人達が犯人ですっ、神官長様っ！」
若い女の声だった。
ジェイスは素早く、声のした方へ目を走らせる。
その娘は、前方の集団の中にいた。長い黒髪と深緑色の瞳をした、愛らしい顔の娘だった。
髪は後頭部で高めに一つに結っている。垂らした総が、生成りの神官服の後襟で揺れている。
娘は必死の表情で、もう一度、今度は兵士長に向かって言った。
「間違いありません。兵士長様、その人達が魔法石を盗んだのです。私の言う事を聞いて下さいっ」
兵士長は、鬼の形相でジェイス達を睨む。
隣で、神官長は、ためらうように再びクレメントを見た。
「しかし……」
「私の言う事を聞いて下さい、神官長様。その人達が盗人ですっ」
ジェイスは、娘の発音に妙な癖があるのに気が付いた。

8

何処かの国の訛りのようだが、やけに勘に触る発音だ。
すぐ側で、クレメントが、小さく息を飲む音がした。
何を驚いたのか尋ねようと横を向いた途端、いきなり腕を掴まれた。
「なん……？」
視線を戻すと、兵士長が腕を掴んでいた。
「貴様達が盗人だ、間違いない」
「はあっ？！」
違うと申し立てているのを、全く聞いていなかったのか？
呆れて、ジェイスは、掴まれた腕と兵士長の顔を、交互に見る。
「あのー、俺達は本当に関係ないんだけど」
喧嘩覚悟のシェイラとは対照的に、ジェイスは、やはり穏便に済ませられるならそうしたい、と、大人しく反抗してみる。
しかし、兵士長は、まるで彼の言葉など耳に入っていないようだ。
「貴様達が、盗人だ」
ずいっ、と、掴んだジェイスの腕を引き、強引に連行しようとする。
厳めしいが、貼付いたように形相を全く変えない兵士長の態度に違和感を覚え、ジェイスは無言で掴まれた腕を振り解いた。
兵士長が、睨んではいるが空ろな目で、ジェイスを振り返る。
「だから、関係ないって」
「……あの方が正しい。あなた達が犯人だ」
だが、今度は神官長までが、娘の言葉を肯定した。
娘がまた言った。
「捕まえなさい、兵士の方々。あの人達が賊ですっ」
「違うって、言ってるでしょっ？！」
シェイラが吼えた。

しかし、娘の言葉に従って兵達は一斉に剣を抜く。
「……こーいう、騒ぎの起こし方、したくねえんだけどなあ」
じりじりと寄せて来る彼等に、ジェイスは仕方なく、背中の大剣の柄を握った。
団体からまた悲鳴が上がった。
シェイラも腰の剣を抜き放つ。
「抵抗するなら、殺せっ！」
兵士長が叫んだ。
迎え撃つため剣を構えた二人に、クレメントが鋭く指示した。
「殺してはいけませんっ」
「分かってるってっ！」
他国の兵士を手に掛ければ、ジェイスの立場上、身分がばれた時が厄介だ。それに、場所も礼拝堂という、最も血を嫌う所である。
左から斬り掛かってきた一人が振り下ろした剣をかい潜り様、ジェイスは抜刀した大剣の柄で兵士の鳩尾に当て身を食らわす。
揉んどり打って倒れた兵士の背後から襲ってきた二人目は、回し蹴りで弾き飛ばした。
ちらりと目の端に入った相棒のシェイラも、片刃剣の峰を上手く利用し、兵士を次々と床に転がしている。
たった二人に手こずる部下に業を煮やした兵士長が、更なる増員のために緊急用の呼ぶ子笛を吹いた。
笛を聞き付けた神殿警護の兵士達が、奥の詰め所から礼拝所へ、ばたばたと駆けて来る。
その数、ざっと数えても、２０人は下らない。
「ちょおっ……！　いくら何でも、この人数を俺とシェイラだけで転がすのは、無理だぞ？」
さすがに降参、と、手を挙げかけたジェイスに、クレメントが真剣な声で返して来た。
「ええ。もうこれ以上は。？？逃げましょう」
言うなり、クレメントは兵士達に右手の掌を向けた。

呪文の詠唱も何も無かった。
クレメントの掌が向いた方向に、いきなり小さな竜巻きが起こった。竜巻きはたちまち、ジェイス達に迫っていた兵士達を突き倒す。
驚いて動きを止めてしまったジェイスとシェイラに、クレメントが早口で促した。
「外へ出てっ！」
クレメントは自分の魔法の効果など全く頓着せずに、素早く扉の外へ飛び出した。
ジェイス達も、それに続く。
見物人を礼拝堂内へ入れぬよう押さえていた外の兵士が、唐突に開けられた扉に驚き振り返る。
「捕まえろっ！」という兵士長の怒声に、幾人かの兵士がジェイス達を阻止しようと立ちはだかった。
ジェイスはとっ掛かって来た二人を拳骨で排除する。倒れる兵士を避けた群衆が割れた隙間をさらに広げ、三人は大通りへと出た。
「待てっ！」
礼拝堂から出て来た兵士が、彼等が分けた人波を辿って追って来る。
「しつこいですねっ」
クレメントは立ち止まると、もう一度掌を追っ手へ向かって上げた。
今度は眩い光が、兵士達の頭上で炸裂する。
周囲に居合わせたやじ馬達も、一斉に目を覆ってその場に屈み込んだ。
その隙に、三人は大通りから脇道へと一目散に逃げ込んだ。

9

神殿内での騒ぎが始まると同時に外へと逃走した男は、広場の雑踏を通り抜け正面向かって右手の森の中へと入った。
この森は、ここにウォーム神殿を建てる以前から自生していた草木を、そのままそっくり残している。
自然神であるウォームの性格を考えて、ロンダヌス初代の大神官が森を残したためだった。
森の裏手は緩やかな崖地。ウォーム神殿は、小高い丘の上を平に削って建てられている。そのため、西大通りはなだらかな坂道になっていた。
太古から生きているであろう大木の陰へ身を隠すと、男は周囲に人気が無いのを確認して懐へ手を入れた。
フード付きの外套の内ポケットから取り出したのは、先程奪取した魔法石である。
盗難直前には赤い光を発した石は、今は穏やかな白い光を帯びている。
光の色を確認し、男はふっ、と笑いを漏らした。
「どうやら、大神官の手を三百年振りに離れたな」
神殿内に安置されていた時は、卵色の光を放っていた。
それがどうして赤くなり、また今度は純白の光となったのか。
男は石を手の中で二、三度転がす。
「それにしても、思っていたより小さい。これではろくに用はなさないな。……やはり一番大きなかけらを盗らねば駄目か」
呟くと、男は再び魔法石を懐へ終った。
その時、すぐ近くで落ちた小枝を踏み締める音がした。男は素早くそちらを振り向く。
と、十歳くらいの少年が、灌木の影から彼を見ていた。
男は少年の方へ首を向けたまま、ゆっくりと被っていたフードを

外した。
現れたのは、褐色の肌に赤い瞳、銀の髪をした端正な、しかし氷のように冷たい雰囲気の面立ちだった。
美しい盗賊は、彼の美貌に見蕩れたのか、動かない少年の側へ二歩三歩と近付いた。腕が届く距離まで来た男は、少年の細い顎に長い指を掛けた。
「名前は？」
「……アロウ」
少年は震える声で答えた。男の赤い瞳が、冷たく微笑む。
「ではアロウ、君はここで私と出会った事を、誰かに話してはならない。話せば、即座に君の命は無い」
幼いながら、アロウは男の言葉の意味を理解したようだった。夏の暑さで薔薇色だった顔色が、みるみる蒼白になる
「……どうして？」
それでも、果敢に聞き返したアロウに、男はくくっ、と喉を鳴らす。
「いい質問だ。それは、私が魔導師だからだ。七賢者を凌ぐ程の力のある私には、側に行かなくとも君の名前だけを使って君に死の呪文を掛ける事が出来る。……嘘だと思うなら、やってみようか？」
少年は、押さえられたままの頭を弱々しく振った。
男はもう一度微笑んだ。
「いい子だ。では行きなさい」
アロウの顎から男の指が外れる。
少年が転がるように森の出口へと走り去るのを見送って、男は小さく呪文を唱えた。
途端、小規模のつむじ風が男の身体を包む。
渦巻く風は地面に落ちている木の葉や小枝を巻き込み中空へと巻き上げる。
高みへ持ち上げられた枝が、数秒後、不意に力無く地面に落下して来た。

森の中が再び初夏の湿った空気と静寂を取り戻した時、男の姿は無くなっていた。

１０（前書き）

ううむ……。

話がなかなか前へ進まない……

10

どれくらい走り回ったか。
大通りからかなり離れた、ごちゃごちゃとした裏道を進み、何度目になるか分からないくらいの小さな曲り角を曲がったところで、ジェイス達三人は漸く足を止めた。
耳をそばだててみる。先程まで聞こえていた兵士の「待てっ！」という声と軍靴の音は、もう聞こえない。
やっと兵士を巻けたらしい。
ほっと、詰めていた息を吐いて、ジェイスはクレメントを見た。
白析の額にうっすら汗を掻いた『自称宮廷魔導師』は、頬に若緑色の髪を一筋貼付けて空を仰いでいる。
軽く息を切らせたクレメントは、ジェイスの視線に気付くと、婉然と微笑った。
「随分走りましたねぇ」
「ああ」ジェイスは、クレメントをまじまじと見詰めてしまっていた自分が恥ずかしくなって、ふい、と視線を逸らした。
「こんなに走ったのって、一昨年の戦場以来だぜ」
「一昨年の、戦？」
クレメントが、きょとんとした顔で訊いた。
「確かお二人は、ランダスから来られたっておっしゃいましたよね？　あの内戦に加わっておられたのですか？」
ジェイスは、ぎくりとしてシェイラを見た。
シェイラが慌てて答える。
「ええ？？、ああそうっ。フィアスの内乱が終わった直後だったんだけど、知り合いの傭兵が、ランダスの雲行きが怪しいから、もしかしたら仕事にありつけるかもって連絡して来て。それでランダスに行ったのよ。そしたら、丁度カーライズ公の軍で傭兵を募ってて、そこに入ったの」

クレメントは、シェイラの話を聞きながら、黙ってジェイスの顔を見詰めていた。
銀色の、綺麗な目にじっと見詰められて、ジェイスは、また心臓が走り始めるのを感じる。
ふと、クレメントが彼に尋ねた。
「ジェイスさんは、随分立派な大剣をお持ちですね？」
彼の大剣は、五代前の騎士カーライズ卿が、東の隣国アストランスとの戦で功績を挙げた褒美として、当時の王ティルス・アーバインから公爵位と共に報償として下された剣である。
本来なら当主のものなのだが、ジェイスが内戦で手柄をたてた折り、現在のカーライズ家の当主である兄が、王から伯爵位を賜った祝いとしてくれたのだ。
もちろん、現国王の了解も得ている。
それ程、先の内戦はランダスにとって重要な戦だった。
国王所有の剣であった大剣は、鞘にも柄にも、繊細にして美麗な文様が施されている。
それだけでなく、刀身も、鉄の中でも一番品質の良いコルーガ西部の鋼鉄が使われているため、市井で出回っているものに比べ遥かに切れ味も鋭く錆びにくい。
この剣も鞘も、山の芸術家と言われ、貴金属や武器を作らせれば人間を遥かに凌ぐ優れたものを作り出すスモール・アルフル（背の低い高位妖精族）が作ったものである。
スモール・アルフルの造形品は数が少なく、しかも材料も高価であるので、所持しているのはどの国も王侯貴族、とりわけ王の武具や武器が一般的である。
逆に言えば、一介の傭兵が所持出来るような代物ではない。
もし、クレメントが王族や貴族の出であるなら、それくらいは常識として知っている。
そして、宮廷魔導師には王侯貴族の子弟が多いのが常であった。
このままでは、素性がバレる。

ランダスの『英雄伯爵』がお忍びでロンダヌスに来ているなどと知れれば、様々な詮索をされ兼ねない。
「あー……、これは、俺の家にあったもんなんだ」
嘘ではない。が、誤魔化すにしてはあまりにも下手な言い訳に、シェイラが額に手を当てて横を向いた。

１０（後書き）

はっきり言って、ジェイスはほんとに『剣バカ』です（汗）

11

案の定、クレメントは柳眉を僅かに上げた。
「ということは、ジェイスさんのご実家は、貴族か王族ですか？」
「あーと……」
「あっ、いいえっ」
しどろもどろの主を見兼ねて、シェイラが口を出した。
「ジェイスの家は、元は貴族だったのよっ。今は落ちぶれちゃったけど。ね？　そう言ってたじゃない？」
「あ、ああ」
彼女の話に合わせて、ジェイスは頷く。
笑った顔が思いっきり引き攣った。
「そうですか」
クレメントは、何となく納得行かないという表情で、それでも頷いた。
「ところで、お二人は恋人同士か、もしかして？」
「ああ、そんなんじゃないって」
話題が自分の身分から離れたので、ジェイスはほっとして軽く言った。
「俺とシェイラは、ただの友達だ。戦友ってやつだな。一昨年の戦いで、同じ釜の飯を食って、生死を共にしたし」
「……そうなんですか」
クレメントは、ふっ、と、眉間を開いた。
笑顔に戻った美しい魔導師に、ジェイスはまた、見蕩れてしまった。
全く不覚である。どうやら、あり得ない心情を、ジェイスはクレメントに対し持ってしまった、らしい。
「とっ、ところでさ、この辺りって、全然人がいねえな？」
己の心中を悟られまいと、話を切り替え、ジェイスは薄汚いレン

ガの建物を振仰ぐ。
昼間だというのに、どの窓も錆び付いた鉄の鎧戸が、しっかりと閉まっている。
たまに開いている窓もあるが、そこには、やけに派手なカーテンがぶら下がっていた。
「もしかして、この辺って娼館街か？」
「もしかしなくても娼館街よ」
シェイラが、眉を顰めて斜め左の角を顎で示す。
角の少し先に建物の入り口があり、その脇に金縁の古びた看板が掛けてある。
『小夜鳥姫の館』
「この辺りは、ロレーヌ自治大臣から認可を受けていない娼婦を雇っている、言わばもぐりの娼館街です。王都警備の衛兵団の上の方に賄賂を渡し、目こぼししてもらっているんでしょう」
「詳しいんだな」
宮廷魔導師の主な仕事は、王宮内の書庫や貴族の館の書棚に眠っている古い書物の解読や保管、あとは王族貴族の子弟の教育である。
己の身分や仕事柄、こういったいかがわしい場所に出入りする事は皆無と言っていい。
そういう職業の人間が、何故に市井の、しかも場末の情報を知っているのか。
そもそも宮廷魔導師である彼が、どうして神殿に、祭事でもないのに昼日中一人でふらりとやって来たのか。
どう考えても、宮廷魔導師、ではないだろう。とすれば、思い当たる身分は、高位の貴族、の令息か。
ジェイスも人の事は言えないが、身の上を隠しているにしては、芝居が下手過ぎる。
その美貌に、少なからず気を惹かれているジェイスとしては、どうしても素性を知りたい気分に駆られる。が、こちらも身分を隠している以上、色々聞き出すのは得策とは言えない。

分からない相手と長く一緒に過ごすのは、危険だ。
特に、もし推測通りクレメントが貴族の子息なら、彼の一言でロンダヌス王家や貴族達に、ジェイスの入国が知られてしまう。国の中枢に存在が知られれば、遠からず、故国ランダスに連絡されてしまうだろう。
それに、腹の探り合いは、はっきり言って疲れる。まして、気を惹かれる相手とは、なおさらやりたくない。
未練はあるが、それはそれとして割り切って、早々にクレメントから離れようと決め、ジェイスは口を開いた。

12

「さて、追っ手も巻いた事だし。俺らはこの辺で？？」
「おや、どちらに行かれるんです？」
クレメントは、わざとらしく首を傾げる。
「って、別に何処でもいいだろ？　あんたには関係ない」
少し苛立って、ジェイスは口調を荒げた。
「神殿での騒ぎがまだ続いてるんなら、俺らとあんたが一緒にいるのは目立つし不味いだろ？　だからここらでさよならしよう」
「そうですか……。まあ、そういう考えもあるでしょう。でも、このままでは僕もあなた達も、魔法石泥棒の嫌疑を掛けられたままですよ？　ジェイスさんはそれで宜しいんですか？」
「それは……」
大変宜しくない。
これからまだまだ旅を続けなければならない身の上として、常にロンダヌスの追っ手を気にしていなければならないのは、甚だうっとうしい。
考え込んでしまったジェイスに代わり、シェイラが口を開いた。
「じゃあ、あなたには何か方法があるっていうの？」
「簡単です」
クレメントはにっこりと笑った。
「犯人を捕まえればいいんです」
「そりゃ、簡単なこった」
ジェイスは呆れた。
「あのなあ。あの神殿の状況で魔法石を盗んだ挙げ句に逃げ遂せた盗人だぞ？　そんなんどうやって探すんだよっ」
「心当たりなら、あります」
「は？」
「僕と、一緒に来て頂けますか？」

クレメントがジェイスの顔を覗き込んだ。銀の瞳が謎めいた光を帯びている。
ジェイスは一瞬、返答に詰まる。
と、クレメントの右手がくるり、と大きく輪を描いた。
その刹那。
ジェイスの足が、いきなり地を離れた。
「うっわっ！」
世界が、ぐるりと回転した。そのまま、もの凄い早さで景色が後ろへ流れる。
と同時に強い風が全身に当たり、息も出来ない程の圧迫感が襲う。
身体は完全に回転している。気分が悪く、吐きそうだ。
あとどれくらいこんな状況が続くのか。
「ぐわあぁぁぁ！」
我慢出来ずにジェイスが大声を上げた時、唐突にそれは止んだ。
どすん、という鈍い音を響かせ、彼は地面に落ちた。
「いってーっ！」
「きゃあっ！」
思い切り尻餅をついたジェイスの隣に、シェイラが落ちて来た。
「ったく、どーなってんだよっ……」
全く理解不能な出来事に、ぼやきながら周囲を見回すと、そこは先刻までいた娼館街とは全く違った景色が広がっていた。

１２（後書き）

クレメント、結構ハチャメチャです・・・

1

一面の、草原である。
茫々と生えた夏草は幾重にも折り重なり、遠くの木の梢さえ微かにしか見えない。
頭上で、ひばりが高くさえずっている。
夏節祭の賑わいは何処へやら、遠くに民家が数軒見えるだけで、人の姿は全く無い。
民家の手前は畑だろう。青々とした麦の穂が夏風に靡いている。
「……どこだ、ここは？」
ジェイスは、一変した風景に戸惑う。
「ここはロレーヌの郊外の、リトという村の外れです」
クレメントの声が答えた。ジェイスは声のした方を振り向く。
美貌の魔導師は、己の腰丈程に屋根のてっぺんが来る、小さな白い建物の前に立っていた。
生い茂った夏草が、建物の周囲を覆っている。
何の目的で、自分達をこんなど田舎まで引っ張って来たのか？
ジェイスは、呆れて脱力する。
もう一度草の上にへたってしまったジェイスに代わり、怒ったシェイラがどかどかと足音を立てて、クレメントへ近付いた。
「あんたっ、一体どういう積もりっ？！　何だってこんなとこに私達を？？何よ？　この掘建て小屋は？」
「これは、名の無い神の祠、と、この辺りでは呼ばれています」
「名の無い……？」
ジェイスは興味を引かれ、立ち上がると、二人の側へと寄った。
祠は、ジェイスの腰の辺りに屋根が来る程、小さい。
ジェイスはしゃがむと、祠の正面の白い扉を眺めた。
扉の上には小さな三角屋根が付けられている。屋根の真下、庇になる部分には、イリヤ神殿やウォーム神殿でも見られる植物の紋様

が彫刻されている。
普通、各神殿の正面扉の庇に描かれる紋様は、その神殿の主神に関係のある植物であり、それが、その神殿がどの神のものであるかを現す。
大体が大陸に自生し、一度は目にした植物なのだが、この祠の庇のそれは、ジェイスが思い出す限り、一度も見た事が無い。
不思議に思っていると、同じ事を考えたらしいシェイラが、それを口にした。
「見た事の無い植物だわ……。空想の花なのかしら？」
「いえ」と、クレメントが首を振った。
「これは、かつてこの大陸に生息していた花です。ウォームとその配下の神が降臨する以前、この大陸にはこの花が咲いていたのでしょう」
「今は、全く無いの？」
「多分。？？祠は、まだこの花がこの辺りに咲いていた頃に造られたのだと思います。実際、リトの村人に尋ねても、この祠がいつ頃からあるのか、分からないそうです」
「でもそんな話、あなた何処から……？」
シェイラの質問に、クレメントは肩を竦める。
「ロレーヌの王宮には、開かずの間が幾つもあります。その中のひとつが、ウォーム降臨以前の大陸について書かれた書物を集めた部屋でした。大半はカスタ語の古典で殆ど読めませんでしたが、ひとつ何とか読めるものがあって、その書物の中にこの花の事が書かれてありました」
「開かずの間に納められてたって、それ、禁書じゃないの？　あなた勝手に開かずの間に忍び込んで、禁書を読んだの？」
「まあ、そうとも言えますね」
悪戯っぽく笑ったクレメントに、シェイラは眉を釣り上げた。

2

「あのねえ……」
「うおっ、この扉開かねえぞっ！」
二人の話はそっちのけで、扉の中を覗こうとしたジェイスは、びくともしない扉に驚く。
「鍵が掛かってる訳じゃねえよな？」
しげしげと祠の扉を眺めるジェイスに、クレメントが微苦笑を漏らす。
「ええ。どうしても開かないんです。僕も、解除の呪文やその他色々な呪文で何度も開けようと試みたんですけど。どうやらこの祠の神に仕えていた神官か巫女が、この神独特の呪文で封じたようです」
「ああそうか、そうなると、その呪文の仕組みが分からなければ開けようがないものね」
シェイラの補足に、クレメントは頷く。
「その通りです。シェイラさんはどうやら、随分魔法の勉強をなさったようですね？」
「昔ね。でも自分で使える呪文は、火球くらいよ」
「それでも、戦場では大変な武器でしょう？」
「ああ、そうだった」ジェイスが頷いた。
「シェイラの魔法のお陰で、結構味方は助かったぜ。何せ一遍に十人はふっ飛ばすからな」
「そんなことないわよっ、せいぜい五人よ」
褒められて、いささか面映いシェイラは、両腕を組んで、わざと真面目な顔を作った。
初夏の熱い風が、さわさわと草を揺らした。
ひとしきり話に区切りがついたところで、ジェイスは一番大事な事柄に思い当たった。
「っと、で、どうして、あんたこんなとこに、俺らをふっ飛ばした

んだ？」
「ああ」
クレメントは、よく思い出したなという顔でジェイスを見た。
「これです」
ゆっくりとクレメントが指差したのは、ジェイスの足元だった。
ジェイスは、クレメントの動作に釣られゆっくり下を見た。しかしその途端。
「おっわっ！」
「何これっ！」
ジェイスも、そしてシェイラも、白い大きな敷石の上に描かれた円の上に立っていた。
円の直径は、丁度大人の男一人が立って余裕で入る程である。
中には更に小さい円が描かれ、外円と小さい円の間に不思議な形の文字のような模様が、縁に沿って細かく描かれている。
小さい円の内側には、頭に角の生えた、人とも動物とも付かないものが一匹、描いてあった。
「これ、魔法陣よね……？」
恐る恐るそこから足を外に移しながら、シェイラがクレメントに訊いた。
「ええ」と、クレメントが頷く。
「でも、赤い魔法陣って、初めて見たわ」
「この線、血じゃねえの？」
先にさっさと退いたジェイスは、腰を折って、魔法陣の赤黒い線を眺める。
「そうです。これは魔法陣。しかも、血で描かれた魔法陣です」
シェイラが、顔を歪めて片手を口に当てる。
ジェイスは、気色悪さに、思わず唸る。
「うげっ、やっぱり」
「僕は、前々からこの祠がノルオール縁の神のものではないかと思っていました」

「ノルオールって、カガスに封じられた、怒りの女神の？」
クレメントは、シェイラに頷いた。
「でも、縁の神って……。ノルオールの兄妹は確かディオール。けど女神ディオールは闇の神カルーの妻だから、祠はグルゼ島にしかないんじゃ？？」
「ディオールのものならそうです。これはノルオールの他の兄妹神の祠、と考えられます」
「他に兄妹がいたの？」
「雷神ギィウォース、炎神レギン、風神ユル、そして豪雪神ニール。しかしこの神々はウォームとの戦いに破れ、今は冥府の牢の中です。？？この祠は、それらの神々の中の誰かのものと思われます」

3

「そんな話……」聞いたことがない、と、シェイラは目を丸くする。
「それも、ロンダヌスの王宮の書庫の禁書からの知識か？」
開かずの間へ勝手に出入りしているらしい話といい、怪しいを通り越して、クレメントは多分、いや、絶対に、高位貴族の子息だろう、とジェイスは確信した。
下手をすれば、王家と、かなり近い血縁の家柄の出である。
猜疑心を隠さずに訊ねたジェイスに、クレメントは、本心の見えない微笑で頷いた。
「仰る通り、です。ノルオールの兄妹神の伝説は、書庫の中でも禁書の本の内容です。ですが、ノルン・アルフルはこの祠が誰を祀っているのか、ずっと知っていたようです」
「ノルン……、アルフル？」
再び出て来た聞き慣れない名称に、ジェイスは眉を寄せた。
「『ノルオールの子』と呼ばれる、闇の妖精族です。ノルン・アルフルは、ノルオールが造り出したのです。ノルオールは、先ほどシェイラさんが仰った通り、別名『影の女神』『怒りの女神』とも呼ばれています。ノルン・アルフルは、その発生から特殊だったために、彼等独特の魔法が幾つかあります。この魔法陣？？血の標も、そのひとつです」
「血の標……」
呆然と呟いて、シェイラは難しい表情で改めて魔法陣を見下ろす。
「ノルン・アルフルの血は、それ自体が闇の魔力を持っています。その血で描かれた魔法陣は、通常の魔法陣と同じく予め同様の魔法陣を描いた場所との間に限り通路を開く事が出来ます。しかも、通常の魔法陣程複雑な魔法紋章や呪文の書き込みの必要が無い」
「へええ。そんな便利な使い方が出来るんだ」
ジェイスは単純に感心した。

「で、これを使って移動すると、やっぱりさっきみたいに目の前がぐるぐるするのか？」
飛んでもなく気持ち悪かった先程のクレメントの魔法を思い出して、ジェイスは真剣に訊いた。
美貌の魔導師は、苦笑する。
「いえ、魔法陣での通路移動は、本当に一瞬です。先程お二人をここへお連れしたのは飛翔の魔法で、あれの欠点は、風の魔法の変形なので身体が安定しない事なんです。でも、先に魔法陣を描いておいたり、目印を特定して距離を測定しておかなくても移動出来る呪文としては、かなり有効なんですけどね」
うー、とジェイスは唸る。
考え込んでしまった彼は無視して、シェイラが尋ねた。
「ところでさっき、この祠がノルオールの兄妹神のものだって、ノルン・アルフルは知っていたっていったわよね？　でも、あなたはどうして知ったの？」
クレメントは「ああ」と頷く。
「それは、先程シェイラさんがご指摘下さった花の紋様です。実は、ノルオールとその兄妹神は、ウォーム降臨以前にこの大陸を支配していた神々の一族なのです」
「じゃあ、ノルオールはウォームとその配下の神々より、古い神ってこと？」
「そうです」
「で、その古い神々の祠の前に魔法陣があるという事は、では魔法石を盗んだ犯人はノルン・アルフルで、これを使って何処かへ逃げたって言う訳？」
「恐らく」
「じゃ、これを使えば俺らもその犯人の行った場所に行かれるんじゃねえの？」横から、魔法は門外漢のジェイスが口を出す。
「それは、残念ながら出来ません」
きっぱりと、クレメントが否定した。

「何で？」
首を傾げた主で親友の大男を、シェイラは睨み上げて怒鳴った。
「もうっ、だから人の話をよく聞きなさいっ！　さっきクレメントは言ったでしょ、この魔法陣は、ノルン・アルフル独特の魔法なのっ。っていうことは、ノルン・アルフルじゃなけりゃ使えないのっ！　私達には、たとえ魔力があったとしてもこれで何処かへ行くって事は、出来ないのっ！」
「はー、そうなのか」
ジェイスはやっと納得した。

3（後書き）

ジェイス、魔法については本気でバカです・・・（汗）

4（前書き）

拙作をお気に入りにして下さる方が、３人に増えている……
ありがたいことですｍ（＿）ｍ

しかも、累計ＰＶが１０００を突破。ユニークも５００突破と、本当に嬉しい限りです。
ありがとうございますです。

4

クレメントは二人のやり取りに笑いながら、付け加えた。
「まぁ、それだけではなくて、この魔法陣自体、もう行き先を閉じてしまっているようです。ただ、閉じても多少痕跡は残りますから、それで行った先の見当がつくかも知れません」
クレメントは、魔法陣の前に屈むと、片手を円の真上に翳した。その掌から、淡い光が放たれる。
ややあって、クレメントの魔力に反応するように、魔法陣の一部が濃い青の光を帯び始めた。
「北の方角……、色はイリヤの旗色の紺。??ランダスですね」
イリヤの旗色とは、すなわちランダス王家の旗の色である。その色が魔法陣に現れたのに、ジェイスは驚く。
「そんなことが分かるのか?」
「逆に言えば、これだけしか分かりません。ランダスに飛んだ事は分かりましたが、広い国の何処に行ったかは、ここからは読めません」
「これが、ノルン・アルフルの血の魔力……」
シェイラは唸った。
「もしかして、先程神殿で兵士達や神官が豹変したのも、彼等の魔法なの?」
「いえ。あれは多分神聖魔法でしょう。あの娘の発音に魔力の籠った、聞き慣れない韻がありましたから。あんな韻は、古代語魔法にも精霊魔法にもありません」
「どこの神の魔法かは?」
「残念ながら。僕は魔導師で、神官じゃないものですから」
尤もだがつっけんどんなクレメントの言い方に、シェイラは引っ掛かって顔を顰める。

「つーことは、神殿で兵士が急に俺らを犯人扱いしたのは、あの女の魔法で操られてたからなのか？」
やっと話が見えたジェイスに、シェイラが呆れた顔で溜め息を付き、クレメントは思い切り吹き出した。
「あれ？　俺、そんなに変な事言ったか？」
「いーえっ。間違ってはないけど、かなり鈍いだけ」
腕を組んで、シェイラはジェイスを横目で睨んだ。
「どちらにしても、その謎は窃盗の首謀者に聞いてみるしかないですね」
笑いを小悪魔的なものに変えて、クレメントは言った。
悪い予感が、ジェイスの背を悪寒となって走る。
「もしかして……、これからランダスに行くとか言う気か？」
「ジェイスさんは勘がいいですね」
歌うように楽しげ言うと、クレメントは先程と同様、右手をくるり、と回した。
「ちっ、ちょっと待？？」て、と言い切る前に、ジェイスは再び周囲の景色がぐにゃりと歪むのを見た。

ランダスは北国だが、夏は雨期であり結構蒸し暑い。
更に、王都ヴィードは内陸の上に大河リーリスからも距離があり、河の涼風も届かない。
初代の王であり神であるイリヤから僅か十代で王都をここからフィルバディアに移したというのも、もしかしたら十一代のハーベルト王が内陸性気候の蒸し暑さに耐えられなくなったからかも知れない。
しかし、二百年前のアストランスとの戦いで、フィルバディアの王城と街の大半は焼失したため、再びヴィードが王都となった。

砦城らしい武骨な造りのヴィード城のアーチ型の正門に、生温い夏の風が吹き付ける。

4（後書き）

ジェイスとシェイラ、またクレメントに飛ばされちゃいましたー

行き先は、故郷ランダス。

・・・不味いってっ、それは！

5

「あっついなあ……」

今年の冬に新兵になった王城正面警備の兵士は、漸く着慣れた革鎧の前を少し引っ張り、片手を扇に僅かな風を入れる。

濠を隔てた街の方から、祭の音楽が聞こえて来る。

夏節祭の賑わしい雰囲気は、だが堅牢な城の中には微塵も無い。

非番ならば仲間と連れ立って街へ出向く事も出来るが、生憎彼は今日明日ともに勤務だった。

「毎年こうなのでありますか？」

暑さと、賑わいに参加出来ない無念さから、彼は力の無い北部訛りでもう一人の、先輩の警備兵に訊いた。

先輩の兵士も同じように、些かうんざりした表情で革鎧の中を煽ぎながら答える。

「ああ。夏の正門は風が吹いたり止んだりだ。お陰で鎧の中は汗だらけ、一週間で楽に5キロは痩せるぞ。けど、他の警備より日陰があるだけましってもんだ」

レンガ積みの壁だけの他の門とは違い、正門は左右に物見の塔があり、その間を結ぶように通路がある。庇のように前に突き出した通路のお陰で、南向きでもかなり日差しは遮られた。

それでも、暑い門前に釘付けなのに変わりは無い。

新米兵がはあ、と力無く返事をしたその時。

一陣の強風が彼等の顔面に吹き付けた。

兵士達は反射的に顔を片手で覆う。

風はすぐに収まり、二人は手を離した。

と、正門の真ん前、彼等の目の前に、三人の人間が現れた。

「うわっち！」

赤毛の大男は、まるで空から降って来たかのような格好で、思い切り門前の石畳にひっくり返った。

再び魔法で、しかも先程とは比べ物にならない程遠い場所へ運ばれてしまったジェイスは、これも先程より数倍の気持ち悪さに襲われそのまま大の字に伸びる。
その隣に下ろされたシェイラも、腰が抜けて、べったりとその場に座り込んだ。
完全に『魔法酔い』してしまった二人に、この状況を作り出した張本人のクレメントは、困ったように笑う。
「すいませんねぇ、そんなに気持ち悪かったですか？」
「気持ち？？悪い？？、なんて、もんじゃ、ないっ」
最後までしつこく頭を支配している目眩をなんとか追い払おうと、ジェイスは上体を起こして頭を振った。
「どうでもいいけど……、ほんとにこれっ、辛いわよっ」
やっと動悸が治まったシェイラが、よろよろと立ち上がる。
と、門の中央から怒声が響いた。
「貴様らっ、何者だっ！」
いきなり眼前に人間が出現した衝撃からやっと立ち直った警備兵二人が、ジェイス達に槍を構えた。
「ここをランダス王城と知っての乱入かっ？」
「え、ランダス王城……？」
ジェイスは、改めて兵士達のいる門を仰ぎ見る。
「……間違いねえや、ヴィード城だ」
ランダスに行くとは言われたが、まさか王城に連れて来られるとは予想していなかった。
「ちょっとどうするのっ。帰って来たのを誰かに見つかったら？？」
慌てるシェイラに、警備兵達はますます不振感を募らせる。
「おまえ達っ、さては最近この辺りを荒し回っているという、盗賊の仲間かっ！」
「ちーがう、違うっ」
有名な騎士、といっても、下級の兵士達までがジェイスの顔を見知っている訳ではない。

それなりの格好でなければ、騎士だとは分からないのも当然である。

5（後書き）

帰って来ちゃった・・・（汗）

6

ジェイスは手を振ると立ち上がった。立つと更に威圧感の増す大柄な男に、兵士達は臆して後ろへ下がる。
「俺らは怪しいもんじゃないって。ただその……。ちょっと訳ありで」
どうにも説明の言葉が見付からない。
大体、選りによってどうしてヴィード城へなど着地するのか。
シェイラの言う通り、問題ありの面々にうっかりこの状況を見付けられようなものなら、それこそ大事だ。
ジェイスは、恨みを込めてちらりと後ろのクレメントを睨んだ。
ジェイスの事情を察しているのか、魔導師は、わざとらしいにっこり笑顔で見返して来た。
「だって、目標にしやすいところでしょう？」
「そりゃそうだが……」
「あちらだって、人気の無い場所より人の多い所を選びますよ。紛れ易いですから」
理屈はそうだ。
しかし、だからと言って、真っすぐ王城に来なくても良いではないか。
「まずいっ、ぜってー、ここは不味いっ」
呟いて、回れ右をしようとした男の袖を、クレメントが捕まえる。
「何処に行かれるんですか？」
「ってったって、王城には用もないのに入れないぜ？」
「そっ、そうよ。理由が無ければ、無理だわ」
シェイラもジェイスを援護する。
「用は、ありますよ？」
しかし、クレメントは二人の抵抗をけろりと無視し、門兵のほうへ振り向いた。

「あー、すいません。僕達見学者なんですけど、見学の許可って、何処で頂いたらよろしいんでしょうか？」
「見学者ぁ？」
祭時期に城の見学に訪れる者など、殆どいない。まして、空からやって来る見学者など、前代未聞だ。
門兵二人は、増々不振な顔になる。
嘘八百な理由を述べるなら、もうちょっと捻れよ、と、ジェイスが内心ぼやきつつ頭を抱えたその時。
ジェイス達の遥か後方から蹄の音が聞こえて来た。
何事かと、門前の人間全員が振り返る。
城下の道を飛ばして来たのは、黒駒に乗った若い騎士だった。騎士は門前まで全速力で馬を飛ばして来ると、急に手綱を引き締めた。
ジェイス達は、慌てて門の脇に待避した。
「緊急の用件で、国王陛下にお目通りを願います！」
ブレーキを掛けられて棒立ちになる馬上から、若い騎士が大声で述べる。
年嵩の門兵が、慌てて前へ出た。
「貴殿の所属はっ？」
「私はっ、イリヤ神殿警護の騎士パッド・ローエンっ！　神殿にて緊急の事態が起きたため、急ぎ登城しましたっ！」
門前で所属と用件を述べるのは、通常は下馬して行うものである。が、急ぎの用件という騎士は、手順を踏まず、騎乗のまま口上した。
おまけに先刻、妙な連中が城にいれろと言って来たばかりでは、門兵は名乗りだけでは簡単に信用が出来なかった。
「緊急事態とは何事かっ？」
問い返されて、騎士は馬上から驚きの声を上げる。
「何とっ！　一大事だと申し上げているのに、門前で留め置かれるのかっ？」
「先程不審者が城内を窺っていたっ！　貴公もよもやその一味では

……」
「心外ですっ！」
若者は叫んだ。
「私は間違いなく神殿警護の騎士ですっ！　神殿でお預かりしている七賢者の遺品に緊急の事態が起こったので火急参ったのですっ！
国の大事とも言える事、すぐに陛下にお取り次ぎをっ！」

7

「どうやら、魔法石に関係ありですね」
クレメントが、至極冷静な声で囁いた。
「もしかして、盗まれた……？」
シェイラのその言葉に、ジェイスははっとなる。
ロンダヌスとランダス。
二つの国で同じ日に賊が同種の国の宝を盗むなど、偶然ではあり得ない。
ノルン・アルフルの仕業というクレメントの説を内心半信半疑に思っていたジェイスだったが、この状況では本気で信じざるを得なかった。
本当に、ただごとではない、かもしれない。
ジェイスは、俄に胸騒ぎを覚える。
「おいっ！」
不審な三人組に加え緊急の騎馬の登城で慌ている門兵の片方を捕まえて、ジェイスは珍しく怒鳴った。
「宰相カーライズ公に伝えよっ！　弟キリアン伯が緊急の用件があって帰還したとっ！」
「キ……、キリアン伯っ？」
新米の門兵は、何がなんだか分からなくなって目玉をくるくると動かした。
「えー、あんたが？」
「そうだっ、とっとと言いに行けっ！」
ジェイスの迫力に圧されて、新米兵は門の中へ駆け出す。
その前へ、門外の騒ぎを聞き付けた兵士が数人、こちらへやって来た。
「どうした？　何かあったか？」
「歩兵長殿っ！」

眼前に現れた上長に、新兵は慌てて姿勢を正す。
「神殿より火急の騎馬というのが参りましたっ。それから、宰相殿に取次げという不審者が……」
「不審者？」
歩兵長は門の右脇に立つ三人の方へ足早にやって来た。
黒い革鎧を付けた、髭面のがっしりとした剣士である。その人物を見て、ジェイスは思わず笑顔になった。
「ガトー歩兵長じゃないかっ！」
「これは……、ジェイス・キリアン伯っ？」
歩兵長の言葉に、兵士二人が驚愕の面持ちで三人を見た。
ジェイスは、一昨年の戦の時シェイラと同様『同じ死線を潜り抜けた仲間』に満面の笑みを向ける。
「いやあ良かった。名乗ったんだがこいつら信用しなくてよ」
「そうですか。しかし、伯爵は確か、大伯父であられるウィッグ候の館で、ご静養中だったのでは？」
ジェイスが国を後にする際、兄カーライズ公が、ジェイスは病のため大伯父の館で暫く静養すると、周囲に触れ回ったのだ。
無論、内戦の後の火種が燻っている状況で、殆どの王城関係者がカーライズ公の触れを額面通りには解釈していない。
それでも、表向きは『病静養中』のジェイスは、曖昧に笑った。
「ああ？？そうなんだけどな、ちょい野暮用で」
「野暮用、とは？」
「あーと……」
魔法石盗難は、南の大国ロンダヌスにとって、間違いなく国家の一大事である。
例え親しい相手でも、簡単に吹聴していい事柄ではない。
「悪い。今は歩兵長にも言えん」
適当な言い訳が考えられず、ジェイスは誤魔化すためにわざと重々しい雰囲気を作った。
「とにかく、急ぎなんだ」

ガトー歩兵長は、暫しジェイスの顔をじっと見、そして頷いた。
「解りました。??カウル」
はっ、と、前へ出たのは、先程の歩兵の若い方の兵士だった。
「すぐに、キリアン伯のご登城を中へ知らせに行け」
新米警備兵は、踵を鳴らし敬礼をすると、くるりと向きを変えて走り出した。
「程なく中から迎えが参りましょう。……今は夏節祭でお歴々もご不在です。取り敢えず城内へお入り下さい」
夏節祭の時期、貴族達は新年初日の礼拝を済ませると、休暇と称して自領へ戻る者が少なくない。
さすがに、先の戦の盟友である。ジェイスにとって顔を合わせては不味い面々がほぼ不在なのを、ガトーは把握していた。

8

三人はガトーに礼を言い、正門から続く石畳を進み正面入り口へと入った。

玄関広間には、夏節祭の間にも関わらず陳情に訪れた地方官や商人などが、証明書を持って左側の窓口に長く列を作っている。

神殿から来たという騎士は、ジェイスがガトー歩兵長と話している間に城内へと駆け込んだらしい。彼等が城へ入ろうとした時には、既に姿が無かった。

早く事情を確認したい気持ちを抑え、ジェイスはシェイラとクレメントを促して広場中央の大きな円卓に寄った。

「思っていたより、随分と堅固な造りですね」

クレメントは、感心するように周囲を見回す。

「正面門に警備兵が二人しかいないなんて、何と不用心な城なのかと思いましたが、まさか入り口までのアプローチの左右が兵舎だとは」

「ああ」

円卓の上にある、来訪者が訪問理由を記入するための羽ペンを、ジェイスは手持ち無沙汰に弄ぶ。

「ヴィード城は、初代の王にして神であるイリヤが、ノルン・アルフルとの戦いのために建てた砦城が元だ。伝説によれば、当時はこの辺りにも多くのノルン・アルフルが潜伏していて、しょっちゅう襲撃があったとか。それを防ぐために、見た目より警護を重視した造りになってる」

「なるほど、そのために入り口近くに兵舎があるのですね」

「十代目まで使っていて、その後一旦、王都はティリア・ミラ？？現在は無くなっちまったフィルバディアに移ったんだ。けど、二百年前、またここが王都になった」

「炎の魔女率いるアストランス軍との戦い……。二度目の七賢者の

伝説ですね」
ジェイスは、広間の奥、正面玄関の真正面に当たる壁面に目をやった。
そこには、二百年前の大戦が、新たな壁画として描かれている。
炎上し崩れ落ちるフィルバディア城を背景に、多くの人物像が書き込まれている。暗い色合いの画面の中央、小柄な少年の姿で描かれた当時の王の横に、水色の長い髪を靡かせた、長身の魔導師の姿があった。
ケイト・クリスグロフ。女性名だが、れっきとした男性である。
まだ十代の少年であったティルス・アーバイン王の要請でランダスに加勢した彼は、『水のケイト』と呼ばれ七賢者の中でも一番の魔力の持ち主だった。
アーバイン王が即位して間もなく、闇の島カルーへ行ったきり行方不明となったと、ランダス史書には伝えられている。
俗に言う『銀泥湖の悲劇』である。
ケイトとの魔法戦に破れ、フィルバディアの地下に封印されていた、七賢者の紅一点、炎の魔女ファーレンの亡骸を、闇の島の神官にして同じく七賢者の一人エレクトラ・ラ・ニルが、こともあろうに嘆きの女神ディオール復活の儀式に利用しようと持ち去ったのだ。
ニルを追って闇の島に入ったアーバイン王とケイトは、死闘の末ニルを倒したが、その時魔法によって銀泥湖に引き摺られそうになった王を助けて、ケイトはファーレンの亡骸と共に湖に沈んだ、と言われている。
ただ、これはあくまで巷の物語であって、史書には水の賢者が闇の島で死んだ、とは書かれていない。
そのケイトも、今、ジェイスの眼前にいる若緑色の髪をした若者と同じロンダヌス出身であり、同じく絶世の美男だったという。
だが、横向きの壁画の顔は小さく、面影を鮮明に辿る事は出来ない。
もしかしたら、ケイトはクレメントに似ていたかもしれない。

同様の変わった髪の色から勝手にそう連想し、ジェイスはクレメントの美貌を見た。
彼の視線に気付いたクレメントが、にっ、と口角を上げる。
「しかし、やはりあなたはただ者じゃあなかったんですね」
「……は？」
いきなり自分の事を言われて、ジェイスは間抜けな声を出した。
「あなたが、かの有名な『英雄伯爵』ジェイス・キリアン伯でしたか」
「やっぱり、クレメントさんはジェイスの事、何かあると思ってたのね」
シェイラが、ジェイスの横から顔を出した。

9

「そりゃあそうでしょう。だって、神殿にいる時から随分目立ってましたし」
「そんなに？」シェイラは、濃い茶の目を瞬かせる。
「ええ。ロンダヌスには、こんなにはっきりした赤毛の人は少ないんです。おまけに、見るからに腕の立ちそうな、大柄な美女と偉丈夫じゃあ、どうしたって怪しいでしょ？」
怪しいって話なら、そっちのほうが十分怪しいだろうが、と、内心で言ちながら、ジェイスは言い返した。
「でも、傭兵なら俺くらいな奴、幾らでもいるだろうが？」
ジェイスの反論にクレメントはくすり、と笑った。
「品格が違います。あなたは大柄で腕が立ちそうなだけではなくて、やはり騎士としての品があります」
「それって、褒めてんの？」
「他にどう聞こえます？」
クレメントは、傍で見ていたシェイラが思わず赤面する程の艶やな眼差しを、ジェイスに投げた。
「……内戦で、二十人の敵を立て続けに倒した、というのは本当ですか？」
言いながら、クレメントは細い身体を捩るようにジェイスに近付く。
男にしては華奢な白い指が腕に触れると、ジェイスは不覚にも鼓動が跳ね上がった。
「あー、それは……」
うっすら汗さえ浮かんで来る。
「ええと、魔導師さま？」
さすがにこれは場を考えて止めた方がいいと、シェイラが動いた時。

警備兵から連絡を受けた下級の官吏が、玄関広間へやって来た。
「カーライズ公が、伯爵にすぐにお会いになりたいそうです」
若い官吏は「こちらです」と、先に立って歩き出した。
これ幸いとジェイスは胸を撫で下ろした。
逆に、クレメントはちょっと残念そうな面持ちでシェイラの後ろに付いた。
三人は騒がしい広間を抜け奥へと続く短い廊下を通り、大階段へと出た。
階段を二階へと上がり、右へ曲がる。その通路の奥が謁見の間だった。
日干しレンガの斑な色がそのままの薄暗い通路には、等間隔で壁に燭台があり灯が灯されている。
燭台の真下に、祭の間だけ飾る小さなイリヤ神の旗がそれぞれ掛けられていて、そこだけが唯一城の中で夏節祭である事を告げていた。
小さな明かりが行き来する人々の面に仄明るい揺らめきを描く通路を、ジェイス達は歩を早めて官吏の先導で進む。
やがて、彼等は謁見の間の濃茶の重い扉の前へ到着した。
半年振りに扉の前へ立ったジェイスは、感無量でその大きな姿を見上げる。
??半年前、この扉を背にした時には、もしかしたら二度とここには戻って来ないかもしれないと、密かに思っていた。
もし戻る事が出来ても、十年、いや二十年後になるやもしれないと。
永の別れと覚悟してあの時後にした扉を、ジェイスは何と半年という、全く予想していなかった短期間で開けた。
中に入ると、真正面に一段高くなった場所があり、そこに玉座が置かれ王が座っていた。
半年前と変わらず、玉座の左横にジェイスの兄、摂政カーライズ公が立っていた。

ジェイスはゆっくり、玉座の前へと歩いた。
そして王の顔が見える位置で止まり膝を折る。
「ジェイス・キリアン伯、ただいま帰還致しました。ソルニエル一世陛下には、恙無くあらせられるご様子、まことに喜ばしゅう存じます」

9（後書き）

おやおや～～？
クレメントの挙動が危ないです～～
その意味は、先の方で・・・

10

「よく、戻られました」
玉座から、甲高い子供の声が返った。
ランダス現国王ソルニエスは今年１１歳。
幼いが大人に負けぬ胆力と思慮の持ち主で、補佐役の兄共々、ソルニエスが最もこの国の主にふさわしいと、ジェイスは思っていた。
ジェイスは「顔をお上げなさい」という国王の言葉に従い、目線を上げた。
高い背凭れを持つ、大きな肘掛け椅子の玉座にちょこんと腰掛けたソルニエスは、自分と同じ赤毛をした大男の従兄に大きな青い目を細め、愛らしい笑みを作った。
「元気そうで何よりです、伯爵。して、今日はどうしてまた急に戻られたのですか？」
説明しようとジェイスが口を開く先に、カーライズ公の厳しい声が飛んできた。
「と、いうより、何故戻って来たのだっ！」
濃紺の長衣を纏った公は、神経質そうな端正な面立ちを険しくして、腹違いの弟を見詰める。
前カーライズ公の先妻の子である兄ジークリードは、後妻の、先王の末の妹姫の子でランダス王家の血を引くジェイスとは違い、黒い髪をしている。
肩まで伸ばした真っ直ぐな黒髪と、父譲りの端正だが峻厳な面差しが、如何にも厳格で勤勉な彼の性格を表している。
兄は、その容貌の通り、自身はもちろん、他人に対しても手抜きやいい加減を許さない。法を厳守しこれを重んじる事を是とし、誰よりも徹底している。
それは大切であり、決して間違ってはいない。
だが、根が気楽なジェイスとしては、もう少し気を抜いても良い

のではないかと、時々ジークリードを見ていて思う。
幼い王の補佐という難しい仕事をきっちりこなす兄は、間違いなく誇れる兄であり、弟として全幅の信頼を置いている。
が、正直言うと、ジェイスはジークリードのこの峻厳な性格が苦手であった。
「私が、あれ程ほとぼりが冷めるまでは戻ってはならぬと言ったのに。おまえは人の話を何と聞いていたのだっ」
厳しく叱責する摂政を、だがソルニエスが柔らかく嗜めた。
「公、伯爵が危険を冒して戻られたのには、それだけ重大な理由があるのでしょう。まずは伯爵のお話を伺いましょう」
カーライズ公は、はっとしたように君主を振り返ると、「はっ、申し訳ございません」と、頭を下げ一歩下がった。
ジェイスは思わず目を見張った。
半年見ていなかっただけで、ソルニエスはもうこの兄を押さえられるようになっているとは。
幼い王の才気に、改めて感服する。
本当に、彼は将来良い王になる。
そう思ったのは、ジェイスだけではなかった。
「ランダスの国王陛下は、お若いのに物事がよく解っていらっしゃる」
彼の斜め後ろでシェイラと並び控えていたクレメントが、不意に言った。
カーライズ公が、初めて気が付いたという表情でそちらへ目を向けた。
「ジェイス、どなただ？」
「あ、えーと……」
クレメントを、ロンダヌスの宮廷魔導師という怪しげな肩書きで紹介していいのかどうか迷っていると、いきなりソニー王が玉座を飛び下りた。
「陛下っ？」

カーライズ公が慌てて呼び止めるが、ソルニエスはすたすたとクレメントの方へ歩いて行く。
そして、若者の前で止まると優雅に手を差し出した。
「ようこそおいで下さいました、ロンダヌスの王太子殿下」
「王太子、殿下？」

１０（後書き）

王太子、殿下・・・（汗）

11

一瞬、ジェイスは呆然となった。それはカーライズ公もシェイラも同じだったらしく、呆気に取られた顔で二人を見ている。
「陛下、それはまことに、ございますか？」
「はい。公は覚えていらっしゃいませんか？　僕の戴冠式の時、ロンダヌスから祝賀の使者がおいでになって」
「それは、覚えておりますが……」
「晩餐会の時、使者の方とお話したんですが、その時ロンダヌスの王太子殿下のお話が出て、使者の方が国王陛下と王太子殿下の細密画をお持ちだったんです。それを見せて頂いて、お顔を覚えていたんです」
「さような事が……」カーライズ公は、心底驚いたという表情で、口を噤んだ。
即位式の後の晩餐会は、ジェイスも覚えていた。ロンダヌスから祝賀の大使が来ていたのも知っていたが、ソニー王とそんな会話をしていたのは全く知らなかった。
クレメントは、幼い王の青い瞳に真正面から見詰められて、面映そうに顔を歪めた。
「よく、覚えていらっしゃいましたねえ。??すぐに名乗らずに申し訳ありません。ランダス国王陛下にはお初にお目もじ仕ります。僕はロンダヌスの王太子、クレメント・エディン・ダルタニスと申します」
クレメントは、ソルニエスの片手を取ったまま優雅に膝を折った。
「マジかよ……」
宮廷魔導師というのも怪しいとは思っていたが、まさかロンダヌスの王太子だったとは。
驚愕から、思わず呟いたジェイスを、クレメントは微笑んで振り返る。

「キリアン伯にも、ご迷惑掛けましたね」
確かにご迷惑さまだった。
二回も魔法で飛ばされて、尻餅はつくわ吐き気は酷いわ。
それというのも、敵の魔法にまんまとしてやられ、盗人に仕立て上げられたからだ。
が、あそこでクレメントが身分を明かしていれば、逃げ出さなくても済んだのではないのか。
ジェイスは改めて、どっと脱力する。
「いいけどさ。でも、最初に身分を言ってりゃ、魔法石盗難の犯人扱いはされなかったんじゃねえの？」
やけも半分で言ったジェイスに、カーライズ公とシェイラが同時に怒鳴った。
「ジェイスっ！」
「おまえはっ！　殿下に対し何という口の利きようだっ！」
「大体さあ、あんた王太子ならどーして大人しく城ん中に居られねえの。ひょこひょこ一人で神殿なんかに出入りして。今頃国じゃ殿下が消えたって大騒ぎしてんじゃねーの？」
「こらっ！　口を慎めっ！」
「俺は、事実を言ってるんですよ、兄上」
「言い方というものを心得よっ！」
「いえ、いいのですカーライズ公」
クレメントは、静かに首を振った。
「伯爵が怒られるのも道理です。僕があの時さっさと王太子であると告げていれば、お二人を巻き添えにする事もなかったのです。それに、おっしゃる通り、一人でふらついたり危ない事に首を突っ込んだりするのは、世継ぎのする事ではありません」
「そーだよ、分かってんじゃねえか」
「ジェイスっ、もうっ」
シェイラが彼の袖を引っ張る。
クレメントは苦笑した。

11（後書き）

放浪癖のあるお世継ぎ・・・（汗）

ロンダヌス、大丈夫なんでしょーか？

いえ、大丈夫じゃないんです。

12

「ですので、名乗ろうかどうしようか、少し迷ってしまいました。その辺りが、キリアン伯とシェイラさんに、相当怪しまれた由縁です。ただ……、今頃国で心配しているかとのご指摘なら、大丈夫です。僕がふらついて二、三日姿が見えないのはいつもの事で、城の者は慣れてますから」

悪戯っぽく笑うクレメントに、ジェイスは盛大に顔を顰めた。

「自慢出来る事じゃあないでしょ、王太子殿下」

「と、いう訳で、ご迷惑でなければランダス国王陛下には、僕の探索をご許可願いたいのですが」

「それは、先程伯爵のお話に出た、魔法石ですか？」

ソルニエスの質問に、クレメントは真顔で頷いた。

「はい。実は、本日昼頃、ロンダヌスのウォーム神殿から、アルクスク大神官の魔法石が、何者かの手によって盗まれました」

クレメントは、これまでの経緯を、王とカーライズ公に説明した。

「そうだったのですか。それで、ランダスに」

「はい、賊がランダスに行ったという事は、次の狙いはランダス王の大剣かと」

「おいっ、そんな話聞いてないぞっ」

賊がランダスに逃げたから、追って来たのではないのか。

シェイラが腕を引いて注意するのを無視して、ジェイスはクレメントに詰め寄った。

「あんた、それ知っててここへ来たのか？　俺らを引っ張って？」

「ええ？？すいません」

謝る王太子に、ジェイスは二度目の溜め息をついた。

「で？　何でロンダヌスの次にランダスの石なんだ？」

「全ての魔法石を集めるためです。ロンダヌスとランダスは、魔法石の在り処が、まず分かっていますから」

「魔法石を、集める？」
カーライズ公が聞き返した。
「一体何のために？」
公に続けて思わず問いを口にしたシェイラは、従者の身で発言した事を恥じるように口に手を当てる。
ソルニエスは、笑顔でシェイラに頷いた。
「シェイラが言う通りです。クレメント殿下は理由をご存じなのですか？」
クレメントは、一瞬困惑したような表情をした。が、意を決したように話し出した。
「これは、あくまで僕の推測に過ぎませんが。賊の狙いは、カスタ最後の王ライズワースが残した、強大な呪文を完成させる事だと思います」
「それは……？」
「『怒りの女神』の復活呪文です」

1

ミュシャ公国の職人の仕事である、見事なぜんまい仕掛けの大時計が、午後三時の鐘を鳴らした。
それまで高窓から入って来ていた風がぱたり、と止む。
気が付いた侍従達が、閉まっていた南の窓を全て開ける。
再び風が入り始めた室内は、だが皆が押し黙ったままの重い雰囲気だった。
クレメントは、衝撃を受けたの表情のまま固まったように動かない人々を一渡り見回す。
その沈黙をシェイラが破った。
「『怒りの女神』を復活させるなんて……。そんな事が可能なんですか？　だって、カスタ王は魔導師であっても、神官じゃあなかったでしょ？」
「例え神官であっても、神を復活させる呪文など知りません」
クレメントは、きっぱりと答えた。
「けれど、ノルン・アルフルは別です。彼等は母であるノルオールの血を受け継いでいます。それが、彼等に他の神に仕える者には不可能な呪文をあみ出す力を与えています」
「えっ？　じゃあ、カスタ最後の王って、ノルン・アルフルだったのか？」
ジェイスの疑問に、クレメントは「ええ」と頷いた。
「正確には、ノルン・アルフルの血が入った王、です。ライズワースの母君は、スピルランドからいらした姫でした」
その場に居合わせた、ジェイス以外の人間が皆、驚きに目を見開いた。
「スピルランドの王室では、もうその頃に、ノルン・アルフルとの混血が始まっていたのですか……」
カーライズ公が、唸るように言った。

「ええ、多分。スピルランドは、カスタの時代、幾度も蛮族からの攻撃を受けています。ノルン・アルフルは魔力が強い。彼等の助け無しに、数で勝るレイトン族やシュラ族との戦に勝つのは、難しかったのでしょう」

戦に勝った報償に、ファーレン神殿は、奴隷同然だったノルン・アルフルに、密かに領地を与えたのだろう。

そしてノルン・アルフルは、自分達の身の安全の証として、一族の女をスピルランド王宮に送り込んだのだ。

その目論見は、ある意味では成功した、と言える。

元々トール・アルフル同様、出生率が恐ろしく少ないノルン・アルフルは、現在はスピルランド国内でも集落などは全く無いという。

しかし、スピルランド人との混血によって、その血は細々とだが、繋がれているのだ。

1（後書き）

第三章、入りました。

９／１３に、１を改稿しました。

余計な文章を突っ込み過ぎていたので、削りました。

削ったら、びっくりするほど短くなっちゃいましたけど（汗）

2

「カスタ最後の王については、得心致しました。しかしそれだけでは、証拠が不十分であろうと思われますが。殿下は、なぜ賊がノルン・アルフルだと？」

カーライズ公が、峻厳な眼差しをクレメントに向ける。

クレメントは、カーライズ公の視線を、幽かな笑みで躱した。

「キリアン伯にもご同行願った場所で、ノルン・アルフル特有の魔法で描かれた魔法陣を発見しました。その魔法陣は、ウォーム神殿の石が奪われた直後に使われた形跡がありました」

「そこまでは分かったけどさ、その女神さま復活と魔法石は、どういう関係があるんだ？」

魔法を全く知らないジェイスは、ぞんざいだが的を得た質問を投げて来る。

クレメントは、この赤毛の剣豪の、兄とはまた違った鋭い目を、ひた、と見据えた。

「魔法石に関する伝説で誰もが知っているのは、古代カスタ王国で作られたという事と、カスタの遺跡にあったという事です。七賢者もその伝説を頼りに遺跡を冒険し石を見付けました。

しかし、持ち帰った賢者達も、石が広大な遺跡のどの辺りにあったのか、何のためにあったのかは語っていない。いえ、恐らく彼等は誰一人、石が何処のどんな場所にあったか、正確に話す事は出来なかったでしょう。

ライズワースは、古文書によるとカスタの中に呪文を発動させるための建物を造り上げたようです。その何処かにあの石は設置されていました。魔力を増幅する特性を持っているところから、恐らくあの石は建物の中でも一番呪力が集まるように作られた場所に置かれていたと思われます」

「では、あの石が無いと復活の呪文は完成しないのですか？」

ソルニエスが、大きな瞳を更に大きく見開いて、クレメントを見上げた。
幼い王の真っ直ぐな目の中に映る己の顔を見ながら、クレメントは頷いた。
「それを知っているからこそ、賊は魔法石を集めようとしているのだと思います」
「そんな話、殿下は何処でお知りになったんですか？　やっぱりロレーヌ城の書庫？」
シェイラの問いに、クレメントは薄く笑った。
「そうです。ロレーヌ城はカスタ時代、離宮として建てられた城でした。そのせいか、あの城の書庫にはカスタの魔道書や史書がたくさんあります。
ところで魔道書は史書や伝説の本と違い、カスタの魔法文字という特別な文字で書かれている事は、シェイラさんはご存じですよね」
「ええ」
「魔法文字は、魔力を持つ者しか読めません。魔力の無い者がページを見ても、ただの白い紙です。ライズワースが記した『怒りの女神』復活の呪文は、魔法文字の上に、更にノルンア・ルフルの血を読み取るための選別の呪文が掛けられています。即ち、ライズワース王と同じ、ノルン・アルフルの血が一滴でも身体に流れていなければあれは読めないのです」
「と、いうことは、その書物をお読みになられた殿下は、ノルン・アルフルの血をお持ちであると？？？」
カーライズ公が、片眉をさも嫌そうに上げた。
クレメントは、公のあからさまな表情を「かもしれません」とさらりと流した。
「可能性はあります。現に読めた訳ですし。ロンダヌス王家には、カスタ時代も含め二度、スピルランドから王女が妃として嫁いでいますから」

ただし、と、ロンダヌスの王太子は付け加えた。
「僕にはノルン・アルフル特有の魔法は使えません。先程も申し上げた通り、彼等の魔法の痕跡を辿る事くらいは出来ますが」
「ちょっと待てよ」
ジェイスは、今更ながら首を捻った。

2（後書き）

すみません、2も改稿しました。

3

「『怒りの女神』ノルオールがノルン・アルフルを造ったのは分かった。で、その生き残りだか血を継いだ奴が、カスタ最後の王の呪文を完成させてノルオールを復活させようとしてるのも分かった。けどよ、どうしてノルン・アルフルは、ノルオールを復活させたい訳？　何が奴らの得になるんだ？」

彼の問いに、クレメントは少なからず拍子抜けした。

騎士であるジェイスが、魔法を知らないのはいい。が、子供でも知っている『怒りの女神』ノルオールの伝説や、その恐怖を知らないとは。

拍子抜けしただけでなく、キレた人物が部屋の中にもう一人居た。

「……ジェイス、それ、本気で言ってるの？」

シェイラは、カーライズ公には聞こえないよう小さな声で唸った。

「あのですねっ、ノルオールはノルン・アルフルの生みの親なんですの。という事は、女神が復活すれば、ノルン・アルフルの闇の魔力も強くなるんです。再びウォームの勢力、つまり我々ですね、を退け大陸を制圧出来るかも知れないんです。お分かりですか？　ご主人様」

シェイラが怒っている時に出る、普段絶対使わない丁寧な言葉遣いでこんこんと言われ、ジェイスは、黙ってこくこくと頷いた。

「けれどどうして、カスタ王のライズワースがノルオールの復活を望んだのでしょう？」

ソルニエスが、心配そうに言った。

「殿下は先程、ライズワース王がノルン・アルフルの血を継いでいるとおっしゃいましたけど、それに関係あるのですか？」

「ええ」

クレメントは、美しい顔に憂いを履く。

「それが一因である事は推測出来ます。しかし、彼とカスタに関す

る古文書には、彼がスピルランドの姫を母に持っており、ノルン・アルフルの血を濃く継いでいた事と、それまでのカスタ王を遥かに凌駕する強大な魔力を有していた事、それ以上の詳細は書かれていません。ただ……」

ふっと、クレメントは口を閉ざした。

その先は、自分を投影した憶測に過ぎない。ライズワースが、その魔力故に、己と同じ辛さを抱えていたかどうかは、定かではないのだ。

言い掛けて止めたクレメントの横顔を、ジェイスはそっと覗いた。

やや俯けていた顔を、クレメントはいつもの笑顔と共に上げる。

「いえ。まあ、ライズワースの動機は、今回の件に直接関係ありませんし。要は早いところ盗賊を見付けて石を取り戻せば大丈夫です」

「そりゃ、そうだけどさ……」

急に話を変えた王太子に、いまいちすっきりしないものをジェイスは感じた。

「賊がライズワースの呪文を発動させるために魔法石を集めているのなら、やはり神殿の一件も無関係ではないでしょうな……」

カーライズ公は、苦いものを舐めたような表情で言った。

「では、先程の神殿からの使者は、やはりそれに関係しているのですか？」

クレメントは公を見る。

「はい。……実は我が国には王家に伝わる石とは別に、もうひとつ魔法石がありました」

「それは……？」

ジェイスも初耳である。彼とシェイラ、クレメントの三人は、カーライズ公の次の言葉を緊張の面持ちで待った。

「イリヤ神殿に、七賢者の一人カルクトゥース・カスガの魔法石『颯』がありました。先程の使者は、その魔法石が何者かに持ち去られたとの火急の報告です」

4

「由々しき事ではあるのですが、神殿は独自の法と警護体制を持つ、国法の外の機関。僕は報告を受けただけで、探索はあちらに任せようと思っていたのですが……」

ソルニエスは、愛らしい顔を曇らせた。

「公、やはり様子を見て来て下さい。王太子殿下のお話からすると、これは最早ランダス一国の問題ではありません。放っておけば、大陸全土の大問題になるやも」

カーライズ公は、一瞬はっ、と目を見開き、幼い君主を見た。

「畏まりました」

恭しく礼を取った宰相に鷹揚に頷くと、ソルニエスは美しい異国の王太子に改めて向き直った。

「クレメント殿下は、どうなさいますか？」

ソルニエスの配慮に、クレメントは即座に行くと申し出た。

「キリアン伯と従者のシェイラさんも、僕の護衛として連れて行ってよろしいでしょうか？」

「結構です。では、キリアン伯、シェイラ、もしかしたら、まだ国内に賊が残っているやもしれません。ロンダヌス王太子殿下の警護を怠りなきようお願いします」

「はっ」

イリヤ神殿は、ランダス王宮より南へ1キロ程行った所にある。初代の王であるイリヤ神の子、二代ハーゲン王が亡くなった時、遺言によってヴィード城が見える南の丘陵に墓陵を造った。墓陵の前に葬祭殿として建てられた建物が、後にイリヤ神殿となった。

神殿は現代までに幾度か立て直されたが、神殿の北側のハーゲン王の墓所は、神官達の手によって守られ続け、創建当時の荘厳な姿を止めている。

三時の礼拝の終わりの鐘が鳴ると、普段ならば礼拝堂や正面には人気が殆ど無くなる。夏節祭の現在でも、ロンダヌスのウォーム神殿同様、午前中は新年の参拝の信者で溢れるが、午後は普段とあまり変わらない。

だが、今日はさすがに神殿警護の兵士や騎士が数多く出ている。

その兵士や騎士の間を、中との連絡のためか、イリヤの神官戦士達が忙しなく動き回っている。

祭の装飾が華やかに飾られた神殿の内外を人々が右往左往する様は、余計に騒々しく見えた。

「予想してたけど、やっぱりどたばたしてんなぁ」

旅装束のまま、カーライズ公とクレメントの乗った馬車を護衛する形で騎乗したジェイスは、轡を並べるシェイラに神殿中の慌て振りを見ながら言った。

徒歩の従者が先に走り、摂政の到着を門番に伝える。

門番が慌てて開けた門を馬車はゆっくりと通り、正面入り口に前の車止めで止まった。

様子を見ていた警護の騎士が数人、馬車の紋を見て初めて何者か気付いたらしく、慌てて飛んで来た。

「これはっ。お出迎えもせずに失礼致しました。すぐに騎士団長を呼んで参ります」

中の若い騎士の一人が、礼拝堂へ戻ろうとする。公は馬車の扉を開け騎士を呼び止めた。

「それには及ばぬ。こちらから出向く故、案内を頼む」

若い騎士は「かしこまりまして」と一礼した。

ジェイスは飛んで来た厩番に手綱を渡し、馬車を降りた兄とクレメントの後ろへ付いた。

ジェイスに気付いた若い騎士が、素っ頓狂な声を上げた。

5

「キリアン伯でいらっしゃいますかっ？」
「あ？　ああ、そうだけど……」
騎士は、色白の童顔を紅潮させて胸に片手の拳を当てる、武人としての最上級の礼を取った。
「私はパッド・ローエンと申しますっ。先程は火急の事でしたのでご挨拶出来ませんでしたっ！　お目にかかれて光栄ですっ！」
旅に出る以前、王宮に出向くと、ジェイスはこういった若い騎士にしばしば声を掛けられた。
時には腕試しがしたいと、王宮内にも拘わらず、試合を申し込まれる事もあり、かなり辟易していた。
さすがに一般市民にまでは顔は知られていないので、街中ではそんなに追い掛け回されたりはなかった。ので、ジェイスとしては、王宮に居るより街へ出ているほうが、かなり楽だった。
旅に出てからは、尚更である。
久し振りの『ファン出現』をちょっと懐かしく思いながら、ジェイスは聞き覚えのあるその名前に首を傾げた。
「パッド・ローエンって、どっかで聞いたなあ」
「あ、そう言えば」
思い出したシェイラが手を打つ。
「そうだっ！　さっきの神殿からの使者っ！」
「はいっ、そうですっ！」
若者は、増々顔を赤くする。
「悪かったな、こっちも急ぎの用だったんで、覚えて無くてよ」
ジェイスは、シェイラ曰く「女よりも、男が殺せる笑顔」をパッド・ローエンに向けた。
「いえ……、ああ、はいっ！　大丈夫でありますっ！」
真っ赤になり、もはやかちこちの若い騎士に苦笑しながら、クレ

メントが尋ねた。
「それにしても、早馬とはいえ、口上をしてからこちらへ戻るまで、随分とお早かったですねえ？」
「あー、はい。あの後ガトー歩兵長殿がすぐに内殿の侍従の方にお知らせ下さいまして。その上国王陛下が、随分とお早く広間にお出ましになられたものですから……」
「そういうお方なのです。ソニー陛下は」
カーライズ公はしたり顔で、クレメントに頷く。
「ところで、話はその辺にして中へ案内して貰えまいか」
穏やかだが、些か苛立っているのが分かる公の口調に、パッドは「はいっ！」と、飛び上がりそうな勢いで返事をし、くるりと向きを変えた。
まるで仕掛人形のようなぎくしゃくした動作で歩き出した若者に、クレメントは吹き出し、カーライズ公は渋い顔をした。
パッドはジェイス達を礼拝堂の奥に位置する内殿の、一番東側の部屋へ案内した。
神官長の執務室である。
丁度神殿警護の騎士団長と話をしていた神官長は、やって来た一行に驚いて席を立った。
「カーライズ公御自らのお越しとは。先触れを頂ければお出迎えの支度を整えましたのに」
「いや。陛下の早急に事態を見分して参れとのご命令で、不躾を承知で先触れを出さずに参りました」
お許しを、とカーライズ公は神官長に頭を下げる。
「こちらは、ロンダヌスの王太子、クレメント殿下であらせます」
自分のすぐ後ろに立っていたクレメントを、公は身体を横向けて神官長に紹介する。
神官長は、初老の痩せた顔をみるみる驚きの表情に変える。
「なんと……っ。南の大国のお世継ぎが、この北国までわざわざお越しとは」

クレメントは、何も言わず軽く会釈する。
カーライズ公は、更に後ろ控えた弟を見た。
「そしてこれが愚弟です。これの事はよくご存じでしょう」
「はい。キリアン伯は、ランダスではその御名を知らぬ者無き英雄でいらっしゃいますから」
カーライズ公とクレメントは、神官長が勧めた椅子にそれぞれ腰掛けた。

6

ジェイスとシェイラは、二人の背後に立った。
神官長の隣に座った騎士団長が、一同を改めて見回した。
「しかし、ロンダヌスの王太子殿下にキリアン伯とは、こう申し上げてよいのか、そうそうたるお顔触れですが……」
「さて、その事です」
公は、ひとつ咳払いをした。
「本日午後、ロンダヌスでも魔法石盗難の騒ぎがあったのです」
公は、先程クレメントから聞いた経緯を、かいつまんで神官長と騎士団長に語った。
静かに聞いていた神官長は、公が言葉を切ると心痛な面持ちで言った。
「……そのような事件が。では、殿下はその賊を追ってランダスへ参られましたのですか」
「ええ。ですが、相手の方が一枚上手だったようですね」
答えて、クレメントは苦笑した。
「僕は神殿にも魔法石があるのを、知りませんでした」
「それが、私どもも不思議でならないのです。カスガの石は、賢者のたっての頼みで所在を極力外部に漏らさぬようにしておったのです。恐らく、今度のような事を賢者は懸念なさって、そうおっしゃられたのだと推察されます。さて、それがどうして……」
「で、石のあった場所は？」
「この部屋の、右隣の部屋です」
神官長の案内で、一同は隣室へと移った。
普段は使用されず、鍵が掛けられているという部屋だが、今は開けられ、四、五人の騎士と神官が中と外を見張っている。
神官長は、中で調査の指揮を執っていた年配の神官に断り、ジェイス達を招き入れた。

「ここです」
先に入った騎士団長が、室内西側の壁を指差した。
そこには五十センチ四方の大きさの鉄の扉があった。扉は左側に輪の形の取っ手があり、鉄枠に取り付けられた同じ輪と太い錠前で括られ開かないようにされている。
だが、賊は錠前は壊さず、扉の中央に男の拳より少し大きい穴を空けていた。
「こりゃすげえ」
ジェイスは思わず前へ出て、扉を触ろうとした。
と、足先に堅い物が当たった。
「あり？」
二十号程の大きさの、金箔張りの額縁に収まった風景画である。
「この扉の上には、その絵が常に掛けられてあります。絵は、我々が連絡を受けて部屋に入った時にはそのように？？」
「外されて下にあったのですか？」
クレメントの質問に、騎士団長は頷いた。
「この絵の裏に隠し扉がある事は、神殿内の者しか知りません。他の場所を荒らした形跡も無く、賊は真っすぐこの部屋の、この扉だけを目指して来ております。という事は……」
「では、騎士団長は、神殿内の誰かの仕業とお考えですか？」
「……残念ながら」
カーライズ公が小さく唸った。
「この大穴、ユガーの戦斧でも鉄扉をこんな風には出来ないぜ？」
ジェイスは絵を足で左の方へ押して、穴を覗く。
「火薬で爆破したのか？」
に、しては、硫黄の臭いがしない。
「魔法です。破壊の術は、やはりそれなりに魔力が無いと使えない魔法です」
クレメントの言葉に、ジェイスは「ほおぉ」と感心する。

7

「しかし」
カーライズ公が鉄扉へ近付いた。
「こんな大きな穴を空けるとなれば、例え魔法と言えどかなりな音がしただろう……」
「いえ、それが……」
神官長が、言いにくそうに俯いた。
「誰も、何の音も聞いていないのです。どころか、ここへ出入りした者もおりません。この部屋は、神官が日に二度、掃除と通気のために開ける事になっております。時間は午前十一時と午後三時です。午前中は、通常では他の者は神官学舎の方で修練をしております。私も、神学生を教えるために学舎に行っております。
午後は昼食を挟み、二時から一般の礼拝が始まります。ですので、三時に当番の者がここを開ける時には、この辺りには他に誰も居ないのが通常です。今は夏節祭で午前は皆礼拝所へ出ておりますが、当番の時間は変えておりません」
「では、魔法石が無くなっているのに気が付いたのは、三時の時に？」
「はい。当番の者が部屋に入ったところ、この様な有り様になっていたと」
「本当に、十一時から三時の間にここに誰も来なかったのですか？」
カーライズ公が、神官長に念を押す。
神官長は深く頷いた。
「間違いありません。十一時の時の当番の者は、確かにこの部屋に鍵を掛けて出ておりますし。それに……」
突然、神官長の声を遮るように、部屋の外で怒鳴り声がした。
「離してよっ！」
「止めろってっ！　ニーナミーナっ！」

争っている声は、開いていた扉から中へ飛び込んで来た。
「神官長さまっ！」
入って来たのは、若い女性の神官だった。
白い神官服の肩に、癖の強い黒髪が掛かっている。黒目がちの大きな瞳は、いかにも勝ち気そうである。
そのすぐ後ろに、パッド・ローエンが困った顔で立っていた。
パッドがニーナミーナと呼んだその女性神官は、ずかずかと神官長の前へ進んだ。
「どうして私が言った事を、信じて下さらないのですかっ？」
「何の……、何の事だね？」
神官長は、皺の深い顔に困惑を浮かべて彼女を見る。
ニーナミーナは、顔を突き出すようにして言った。
「おとぼけにならないで下さいっ！　今日正午少し前に、神官長はこちらへおいでになってらっしゃいますっ！　私が、お客さまをお取次ぎして、神官長はそのお客さまにお会いになりました。それから、お祭りの礼拝がまだ終わっていないので、お客さまをこの部屋でお待たせするようにと、おっしゃられたんですっ！」
ニーナミーナは、一気にそこまで捲し立てると、苛立った気を鎮めようと大きく深呼吸した。
神官長はおどおどと、彼女の言い分に首を振った。
「いや……、いや。それは違うと、先程も言った筈です。私は、正午に誰も接客していないし、この部屋にも来ていない。
いいですか、ニーナミーナ、あなたの記憶は間違っています」
「いいえっ！」
ニーナミーナは激しく首を振った。
「私は間違っていませんっ！　間違っているのは、神官長、あなたですっ！」
「ニーナミーナっ！」
掴み掛からんばかりの勢いで詰め寄る彼女の肩を、後ろからパッドが押さえた。

「離してってっ！　パッドっ！」
「お客さまの前だって！」
「だから何なのよっ！　私は真実を知らせたいのっ！」
「だからって、今は……」
「いいえ。ぜひ真実をお聞かせ頂きたいですね」
二人の言い争いに、クレメントが口を挟んだ。

8

全く予期していない方向から声がして、パッドもニーナミーナもきょとんとする。
クレメントは、黒髪美人の神官に、にっこりと笑った。
「あなたのお話から察するに、そのお客人というのは、突然神官長をお訪ねになったようですね？」
「あー、はい。……ええと、その前に、あなたどなたですか？」
尤もだが、どうにもずれた感じの彼女の質問に、クレメントとジェイス、シェイラは思わず吹き出す。
カーライズ公は盛大に顔を顰め、神官長と騎士団長は額に手を当てた。
パッドが慌てて、ジェイス達を紹介する。
「いいかニーナミーナ、こちらはロンダヌスの王太子、クレメント殿下だ。で、こちらはカーライズ公、我がランダスの摂政様だ。それとこちらが……」
「こちらは存じ上げてるわ。ジェイス・キリアン伯でしょう？　有名な方だもの」
悪びれず、腰に手を当てて言う彼女に、ジェイスは更に苦笑する。
「覚えてもらってて、光栄だぜ」
「ところで、ええと、ロンダヌス王太子殿下」
「クレメントで結構です」
「ああ、じゃ、クレメント様。神官長をお訪ねのお客さまですよね？　はい、確かに急にいらっしゃったようです。でも、普段は神殿ではそういう方は珍しくありませんので」
各国の神殿には、他の国の神殿から若い神官が頻繁に留学生としてやって来る。神殿同士の交流を深めるためと、ウォーム神とその配下の神々の歴史をよく学ぶためである。
留学生は、予め親書を先に送って来る場合もあるが、往々にして

自国の神殿の留学許可証と、神官長の、行く先の神殿宛の推薦状を持っていきなり来る。
そのようなやり方でも偽者が殆ど皆無なのは、どちらの書状にも神聖魔法で封がされていて、それが各地の神殿によって封印の仕方が違うからである。
封を見れば何処の神殿の書状か一目で分かり、解除する呪文も神聖魔法でなければ開かない。
「今日のお客さまも、留学生のようでした。学舎の廊下でお会いになって、神官長に親書をお見せになってましたから。でも、神官長は一瞬首を傾げられて……。それから少しして、私にお客さまをこちらの部屋でお待たせするようにと、お命じになりました」
「なるほど」
クレメントは頬に手を当て、首を傾げる。
考えている様子の王太子に、神官長は、
「ですから、ニーナミーナの言う事は、私には身に覚えの無い事なのです」と、再度否定する。
「でも、真実ですっ」
「あなたの空想だよ、ニーナミーナ」
「そんなっ……」
「いえ、空想ではないでしょう。現にこうして、扉は魔法によって壊されています。神官長が記憶されていないのは、多分記憶を消されているためでしょう」
ジェイスを含め、クレメント以外の人間が一様に驚いた。
「人の記憶を操作する魔法があるのですかっ？」
シェイラが尋ねる。
「あります。闇の魔法の中に」
「闇の魔法……」
クレメントの肯定に、神官長が青くなる。

8（後書き）

女性神官戦士、ニーナミーナ。
恐いもの知らずのイノシシ娘です・・・（苦笑）

9

「そんな、魔法が……。でも私は……」
「掛けられていない、とおっしゃるのであれば、それが本当かどうか、試してみましょうか？」
「試す……？」
「簡単です」
クレメントは右手の中指と人さし指を揃え、神官長の顔面に先をぴたりと向けた。
左手の同じ指二本を、揃えた指の上に重ね軽く目を閉じる。
「？？解呪（ディスペル）」
指先から白く細い光が発した。光は神官長の額に真っすぐ当たる。
光に額を押された神官長は、僅かに頭を反らせる。
その途端。
神官長の灰色の瞳が大きく見開かれた。
「お……、おお、そうだ……。思い出した。確かに、ニーナミーナの言う通り、正午近くにお客人がみえて、礼拝堂はまだ信者の方で一杯だったので学舎の廊下でお会いしました。……しかし、それ以降の記憶が？？」
「その後は、私が申し上げた通りです。でも、変だと思ったんです。夏節祭のこの時期に留学生の方が来るのも珍しいのに、それも、いつもはどなたがいらしても決してお通ししない部屋でお待たせするとおっしゃるので。でも、よろしいのですか？　ってお聞きしたら、神官長は大丈夫だとおっしゃって」
「恐らく、その客という人物にそうするように言われたのでしょう」
クレメントの指摘に、神官長は両手で顔を覆った。
「何ということだ……。私は自ら大事な魔法石を賊の手に差し出してしまった……」
「仕方ありません。それだけ相手の魔力が強かったのです。それよ

り、その客とはどんな人でしたか？」
クレメントは、顔を上げた神官長とニーナミーナを交互に見た。
ニーナミーナは首を振った。
「私は顔までは見ていません。私が神官長のご指示で学舎までご案内した時は、外套の帽子を深く被っていましたから。だから、声と背格好から女性だというだけしか」
「確か、黒髪の若い巫女でした」
神官長が言った。
「そう、ファーレン神殿の紹介状を持っていました。私はそれと許可証が本物なのを確認し、お返ししして……。それから先が……」
「という事は、敵さんは神官長が書類を読んでいる最中に術を掛けたって訳だ」
ジェイスの言葉に、クレメントがにっこり笑う。
「その通りでしょう。そしてこの部屋へ案内させるようにした」
「変です、私ずっとお二人の側にいましたけど、女性に術を掛けるような素振りは全くありませんでした」ニーナミーナは、口を尖らせる。
クレメントは、柔らかな笑みのまま、女性神官を見た。
「強い魔導師なら、呪文の動作はほんの少しでいいんです。多分その人物も、術を小声で唱えて、それから神官長の身体の何処かに一瞬触ったくらいでしょう」
「額の裏に隠し扉があるというのは、どうやって賊は知ったのですか？　それも神官長から？」
騎士団長の質問に、クレメントは首を振った。
「いえ。人の心を操る程の術者なら、この部屋に入れば在り処はすぐに分かります。魔法石はそれ自体が魔力の塊ですから。どんなに分厚い鉄扉でも、魔法で封印していなければ魔力はそこから漏れて来ます」
「そうですか……。して、魔法石を奪った賊は、どうやって逃走したのでしょう？」

「僕が賊がランダスに来たと分かったのは、ロレーヌ郊外の村に残っていた移動の魔法陣を調べたからです。それから考えれば、多分この近くに同じような魔法陣を、予め描いている筈です」

10

クレメントの言葉を受けて、騎士と神官達は早速神殿の周囲を調べるために出て行った。
ジェイスとシェイラも神殿の騎士に混じり、辺りが暗くなるまで約二時間程、特に人目につきにくい西側の林を中心に探した。
魔法陣は見付からなかったが、ジェイスは林の南側でおかしなものを発見した。
「これ、木切れが女物のローブを着てるぜ」
少し離れた場所を探していたシェイラは、彼の声にそちらへ寄る。
「ほんとだわ。もしかして、賊の遺留品かも」
ジェイスは木切れを、中で待っていたクレメントとカーライズ公に見せた。
「これは……。魔法人形ですね」
木切れを見た途端、クレメントは美貌を引き締めた。
「って何だ？」さっぱり解らないジェイスは、眉を寄せる。
「そのままです。一時的にこういった木切れや紙切れなどを任意の動物や人の姿に変え操り人形にする術です。この術は、普通一定時間が経つと魔力が消え、人形はもとの物に戻ります。
術の効力が働いている間には、遠隔である程度の魔法を使う事が出来ます」
「では、この木切れが神官長に魔法を……？」
納得行かないという顔のカーライズ公に、クレメントははっきりと頷いた。
「そうです。鉄扉を破壊の魔法で壊したのも、この魔法人形でしょう。この人形は、役目を終えると魔法石を主か、または別の人形ないし賊の仲間に渡して、元の木切れに戻ったのです」
午後一杯慌ただしく動き回った神殿の人々は、クレメントの話に一様に肩を落とす。

結局、後一歩のところで賊を特定出来なかった。
「まあ、でもどっちにしても、奴さんはとっくの昔にトンズラしてんだし。どんな手口で魔法石を盗んだかって分かっただけでもよしとするしかねえだろ」
ジェイスの言葉に、疲れた顔をしながらも一同は頷いた。

今日はこれで探索を打ち切ると決め、ジェイス達は一旦王宮へと戻った。
「賊は、ロンダヌスでは血の標を使ってこちらへ移動したので、同じ方法を用いるものだと思い込んでいました」
執務室でジェイス達を待っていたソルニエスに、クレメントは深々と頭を下げた。
「迂闊でした。魔法人形という手段があったのを、全く失念していました。申し訳ありません」
「いいえ。僕達ランダスの者だけでは、到底そこまでも分からなかったと思います。殿下のお力で、賊の正体は掴めたのですから、こちらこそお礼を申し上げます」
幼い王の心底からの礼に、クレメントはほっ、と美貌を和ませた。
「ところで、急なお越しなので大した支度は出来なかったのですが、晩餐の席を設けました。お口に合うかは分かりませんが、我が国の料理を用意させましたので」
キリアン伯もぜひ、と言われ、ジェイスは困った。国王主催の晩餐に、旅で汚れた武装姿のまま出席は出来ない。
かといって私邸に戻っている時間は無い。
「確か、私の私邸でそなたの長衣をいくつか預かっている筈だ」
兄カーライズ公は急ぎ侍従を私邸へ走らせ、屋敷の衣装部屋に残っていたジェイスの長衣を取って来させた。
三十分後に侍従が持って来た私服に、ジェイスは王城の貴賓室を借りて着替えた。
精緻な連続模様が織り込まれた緋色の地に金糸の縁取りをされた

上着は、ジェイスの精悍な美貌を際立たせる。
覗きにやって来たクレメントが、大柄な偉丈夫のあでやかな姿に、うっとりと目を細めた。
「さすが、ランダス一の名家の御曹子です」
「よせって。あんたに言われると妙に照れる」
ジェイスは思わず本音を吐露した。傍で聞いていたシェイラが吹き出す。
「な……、んだよっ」
浅黒い顔を真っ赤にした主の本音には触れず、シェイラは顔を真面目に整え、答えた。
「いえ。王太子殿下はお目が高いと思いまして」
「やはりシェイラさんもそう思いますか？」
婉然と微笑むクレメントに、シェイラが頷く。
「何なんだよっ、二人してっ」
分からないジェイスは焦れて膨れた。
「要するに、惚れ直した、という事です」
「？？なっ」
流し目で、クレメントにさらりと言われて、ジェイスの顔が更に赤くなる。
シェイラとクレメントは、酸欠の魚のように口をぱくつかせるジェイスに大笑いした。
揶揄っているだけなのか、本気なのか？
クレメントの本心は、その挙動からは全く読み取れない。
宴の席へ向かうべく貴賓室を先に出る王太子の細い背へ、ジェイスは小さく「ちぇっ」と舌打ちした。

１０（後書き）

ジェイスにホレてるって・・・
本気なのか、遊んでるだけなのか・・・？
クレメント、謎です。

11

晩餐は、急な召集の割りには豪華なものとなった。
余計な連中の居ない中で、ジェイスは親しい人々と久々にゆっくり語らう事が出来た。
無論、晩餐の主役は彼ではなく、ロンダヌスの王太子殿下である。
いきなり魔法でやって来た大陸真反対の大国の美貌の王太子に対し、事情を知らぬ者達が興味津々となるのは事は致し方無い。
食事の後は無礼講という事も手伝って、クレメントの周囲には、あっという間に人の輪が出来上がった。
「大丈夫かなぁ……」
知人との会話が途切れたジェイスは、ふと気になってそちらへ目をやった。
いかつい髭の面々の間から、鮮やかな若緑の髪が見える。
クレメントは国王の隣に立ち、如才ない態度で重臣達と談話していた。
それはそうだ、と、ジェイスは変な心配をした自分に苦笑する。
確かにちょっと風変わりではあるが、クレメントは間違いなく一国の王太子なのだ。
基本的に国からは動けない国王に代わり、時には外交官として外国へも出向かなければならない立場なのだ。当然こういった席で卒なく立ち回る訓練は受けている。
ただ、少し心配になったのは、一目惚れしたから、というだけではなく、クレメントがどうも人付き合いが苦手なような気がしたからだ。
笑顔を絶やさず、飄々と周囲をあしらっているが、その実、物凄く対人関係は不器用なのではないか。
今日一日という、本当に短い付き合いでの印象でしかないのだが、どうもそんな気がする。

が、ジェイスの第一印象は、いいか悪いかよく当たる。
それが、これからのクレメント、いや二人の間柄に凶と出るか吉と出るかは分からないが。
そんな些細な心配を裡に感じながら、ジェイスはクレメントから視線をもぎ離した。
やがて夜も遅くなり、人々の声が低くなり始めた頃。
幼い国王が眠そうに目を擦り始めたのに気付いたカーライズ公は、皆に宴の終わりを告げた。
ジェイスは、泊まっていいという兄の言葉に甘え、王城から遠い自分の邸宅には帰らず近い兄の館に泊まる事にした。
退出際、挨拶したジェイスをクレメントは呼び止めた。
「明日はちょっと寄りたい所があります。早めにこちらへ来て頂けますか？」
何処へ、と問おうとした時、兄の退出の声がした。ジェイスは、
「じゃあ、早朝に」とだけ返して大広間を出た。
「何処へ行く積もりなのかな？」
カーライズ公の馬車の後ろで、ジェイスはシェイラと轡を並べた。
シェイラは晩餐の間中、他の警護の騎士や剣士と共に次の間に控えていた。帰り際のクレメントの言葉を話すと、彼女は首を傾げた。
「さあ……。殿下の考えてらっしゃる事は、分からないわ。魔法に限らず色々知識をお持ちの方で……。かなり変わってらっしゃるし」
「んだなぁ。あれで王太子じゃあ、周りも大変だろうな」
馬の歩みの揺れに合わせ、ジェイスは頷く。
シェイラは苦笑して首を振った。
「どっちかと言うと、ご本人が辛いんじゃないかしら？」
「何で？」
「だって、私達もそうだけど、周囲の理解の範疇外でしょう、きっと」
「確かにな」
頭脳明晰、なのはいいが、本心を巧みに隠して行動するのは、さ

れたほうが混乱するので困る。
シェイラの言う通り、クレメントの頭の中身は、周囲の理解を超えている。
ただ、周囲に理解されないのをクレメントが苦にしているかどうかは、判らないが。
聡いクレメントは絶対、ジェイスの気持ちを見抜いている。見抜いた上で、自身の想いはジェイスに悟られぬよう、煙幕を張っているのだ。
玄関広間での、クレメントの凄艶な流し目と誘うような態度、それに自分が服を着替えた時の彼の言葉などを思い出して、ジェイスは我知らず赤面した。
「どうかした？」
急に黙ったので、訝しんだシェイラが彼の顔を覗いた。
先を照らす馬車の明かり程度では、顔色までは見えないのが幸いした。
また赤くなっているのがばれれば、シェイラは絶対揶揄ってくる。
「いや、何でも」
済ました声で返したジェイスに、シェイラは「そう」とだけ言って姿勢を戻した。

11（後書き）

ジェイス、翻弄されてます・・・（汗）

1

翌朝、ジェイスは約束通り早い時間に登城した。
午前八時。この時刻には、だがランダス国王は既に起床している。
通常、国王は六時に起床し、七時に朝食、八時前には執務室へ入り、午前十時に主立った重臣が登城して来るまで、書類などに目を通す。
摂政であるカーライズ公は、ソルニエスの仕事の補佐のため毎日八時には登城している。
それに、ジェイスは同行した。
夏節祭も残りあと二日余り。イリヤ神殿への道には早朝から最後の礼拝をしようと赴く信者が多数、出ている。
その中を、神殿とは逆の方向へと、カーライズ公の馬車は進む。ジェイスは昨夜と同じくシェイラと共に馬車の護衛の騎士と轡を並べ、登城した。
取り敢えず国王に挨拶しようと、兄と共に執務室へ行くと、そこに身支度を調えたクレメントがいた。
「これからはロンダヌスまで徒歩になるので、申し訳ないですが衣服をお借りしました」
ロンダヌスの王太子は、昨日着ていた白い長衣ではなく、長期旅行で官吏が身に着ける、鎧代わりの革のベストにカーキ色の木綿のズボン、そしてベージュのローブを纏っている。
腰には、これも昨日までは持っていなかった長剣を下げていた。
全く地味で目立たない服装であるのに、それが逆にクレメントの特異な髪と目の色を際立たせている。
何を纏っても褪せないクレメントの美貌に、ジェイスは欲望を覚えた。
「そっ……、それ、使えるのか？」
場所と状況も構わず頭を擡げた己の中の『狼』に狼狽え、咄嗟に

クレメントを揶揄する。当然ながら、シェイラに思い切り脇を肘で小突かれた。
　クレメントは、くすっ、と楽しげに笑った。その顔は、まるで悪戯を仕掛ける小妖精（フェアリー）のようにも見える。
「一応は。これでも王太子ですから、剣の稽古はしてますし」
「ああ、そっ、そうだよな」
　胸の鼓動が、どうにも鎮まらない。
　13、4の子供でもあるまいに、と自分で呆れつつ、笑いが引き攣るのを直せない。
　ジェイスの、クレメントに対する想いに、間違いなく気付いているシェイラが、しょうがない、というふうに頭を振った。
「それはそうと」
　カーライズ公が、口を挟んだ。
「殿下にはまた急に、ロンダヌスへのご帰国とは……？」
「ええ。考えたのですけれど」
　と、クレメントは真面目な面持ちになる。
「賊をこれ以上追い掛け回しても埒があかない気がしまして。これまでに、二箇所の神殿の魔法石がいとも簡単に賊の手に渡りました。残る魔法石で所在のはっきしているものは、ひとつ。
　ということは、賊は何がなんでもその石が欲しい筈です。今も奪う機会を待ってランダスに残っているやも知れません。それならばその石を囮にした方が、上手くすれば賊の目論見をも打ち破る事が出来るかもと」
「と、いう事は……？」
　眉を寄せた公に、クレメントは頷く。
「ランダスの王の剣を持って、カスタで賊を待ちます」
「それはっ！」
　カーライズ公が目を剥いた。
「ランダスの王剣は、余程の大事が無い限り、国外へ出す事は適いませんっ！　第一、囮にとおっしゃるが、それで本当に剣が賊の手

に渡ってしまったらどうなさるっ。我が国にあれば、大陸一と自負する騎士団が命を賭して守りますっ。その方がどれ程安全かと??」
「僕も」
ソルニエスが、珍しく公の言葉を遮った。
「クレメント殿下のお考えに賛成です」

1（後書き）

ソルニエス１１歳。
大胆な王様です。

2

「賊は狡猾にして強大な魔力を持つ魔導師です。イリヤ神殿の魔法石の奪い方といい、このまま探索を続けてもまず、捕まらないと思います。

それに、殿下のお話ですと、問題は賊が魔法石を奪った事ではなく、カスタの遺跡でそれを使用する事です。ということは、カスタ遺跡自体をどうにかしない限り、魔法石を取り戻してもまた同じ事件が将来起こるでしょう」

幼い国王の意外な発言に、カーライズ公はすっかり狼狽える。

「しっ、しかし……、陛下、もし賊が魔法石をその……、扱い切れずに破壊してしまうような事態が起きました時は……」

「それも致し方ないかな、と思います」

「へっ、陛下っ！」

「先程も言いましたが、もし魔法石が『怒りの女神』復活のための道具なのだとしたら、それこそ壊さなければ危険です」

「ですが、あれはフィルバード王から代々我が王家に伝わる大切な……」

「そのフィルバード王が、あの石は預かったものだとおっしゃっていらしたと、ランダスの史書には書かれいます。僕もそう思います。

大体、魔法を使えない我がランダスの代々の王が、あんなに大きな魔法石を後生大事に宝にしている必要は、本当は無いのではないですか？」

随分と斬新な考え方だと、ジェイスは思った。

まだ１１歳にしかならないソルニエスが、ここまで考えているとは。

いや、１１歳だからこそ、余計な欲に捕われず物事を前向きに捕えられるのかもしれない。

このまま育てば、彼は本当に良い君主になる。

返す言葉を失ったカーライズ公は、眉間に皺を寄せたまま俯いた。
ソルニエスは、全く表情を変えずに、クレメントに向き直った。
「という訳ですので、ランダス王の大剣は、殿下にお預けします。如何様に扱われても結構です」
ソルニエスは、脇に控えた侍従に声を掛ける。侍従は一礼し、文机の後ろの飾り棚に置かれた大剣セプティリアを取り上げた。
眼前に差し出された剣を、だがクレメントは取らなかった。
「では、これはキリアン伯にお預け下さい」
「ジェイスに？」
カーライズ公が顔を上げる。
「何故……？」
「重たいですし」
「……はあ？」
俺は単なる荷物持ちかよ、とジェイスは内心で毒づく。
それが顔に出たらしく、クレメントは軽く笑った。
「というのは冗談にしても。何と言ってもランダス王の大剣です。その血に連なる方が所持してカスタまで運んだ方が、剣のためにもよいでしょう。それに、キリアン伯は剣豪ですから、この剣を使いこなすことも出来ましょう」
暗に守れと言われて、ジェイスは身が引き締まった。
と同時に、本当に自分にこの任が務まるのかという、不安も沸き上がる。
彼は、それを素直に口にした。
「けれど、もし俺……、じゃない、私が賊の手に掛かるような事になれば、ノルオール復活を助ける結果にもなり兼ねません。危険な賭けでは？」
「伯爵は、ご自分が賊に劣るとお考えですか？」
幼い王に逆に切り返され、ジェイスは思わず破顔した。
「いいえ」
ソルニエスも、にっこり笑うと頷いた。

「では、セプティリアをキリアン伯に預けます」
従者が差し出す大剣を、ジェイスは受け取った。

3

「クレメント殿下」
微笑みながら、自分とジェイスのやり取りを見ていたクレメントに、ソルニエスは向き直った。
「これで、王の大剣は大丈夫でしょう。けれど完全に危険を無くするには、賊の目的？？ライズワースの魔法を全く発動出来ないよう、カスタの遺跡を壊す事が必要でしょう。そうでなければ、相手は何度でもこの剣を狙って来るでしょう」
「遺跡を壊すって……。んなでっかいもの、じえない、巨大なものを、どうやって破壊せよと？」
カスタの古代遺跡は、ロンダヌスの国土の3分の1を閉める。
ジェイスは、さらりと飛んでもない話をしたソルニエスに、思わず問い質した。
答えは、クレメントから返った。
「それには僕の力が役に立つ筈です。……何せ、僕は魔力だけは馬鹿みたいにありますから」
クレメントは、自嘲とも取れる笑みをちらりと浮かべる。
彼の言い様が何となく引っ掛かったが、ジェイスは触れなかった。
二本の大剣を背中に背負い、ジェイスは文机の前へ出たソルニエスに膝を折る。
「王の剣は、このキリアン伯、命に替えても守り抜きます」
「どうか、ご無事で任務を果たされますよう」
立ち上がると、入れ替わりにクレメントがソルニエスに軽く膝を折り、礼を取った。
「お世話になりました」
「こちらこそ。また是非、我が国へお出で下さい」
ソルニエスは、愛らしい笑顔でクレメントに答えた。
「どうか……、ご無事で」

己の理解から大きく事態が外れ完全に混乱しているカーライズ公は、弱々しくそれだけをジェイス達の背中へ送った。

「さて、それじゃロンダヌスへ直行か」
玄関広間へ降りて行きながら、ジェイスはひとつ伸びをする。
「でも、王太子殿下、ロンダヌスまで徒歩とは……？」
ジェイスの後についたシェイラが、並んだクレメントに訊ねる。
「ご説明、しませんでしたね」と、クレメントは微笑んだ。
「飛翔の魔法は、何度も使えないんです。あれ、結構魔力を消耗するんですよ」
「え？　って、昨日はけろけろしてたじゃないか？」
素直に驚いて、ジェイスはクレメントを振り返った。
クレメントは苦笑して、答えた。
「だって、倒れていたら探索が出来ないでしょう？」
「じゃあ、昨日はお辛かったんですか？」
眉を曇らせたシェイラに、クレメントは「いいえ」と、美貌に極上の笑みを乗せた。
神々でさえ見蕩れるかと思える笑みに、向けられたシェイラが思わず陶然となる。
勿論、ジェイスは自分の顔色が変わったのに気が付いて、慌てて横を向いた。
「本当に多少です。でも、昨日の今日でまた、というのはさすがに来ると思いまして。それに、キリアン伯もシェイラさんも、魔法での移動は好きではないようですし」
「そ、そりゃ……、そうだけどさ」
「え、えーと、ロンダヌスまで歩きとなると、今日はこれから街道へ出て、次の街までは夕方には着きますが」
どきまぎから解放されたシェイラが、話題を変える。
だが、クレメントは意外な予定を切り出した。
「いいえ。その前にカスガの館へ行きます」

4

「カスガの館って……。何でまた？」
七賢者の一人、カルクトゥース・カスガの館は元の王都フィルバディアにある。カスガが忽然と消えてからは無人で、王とイリヤ神殿の管理下に置かれていた。
「行って、何がある訳では、多分ありません」
きょとんとするジェイスに、クレメントは続けた。
「ただ、賊の痕跡の多少はあるかも、という程度だと思います」
「それだけ？」
「ええ。それだけです」
きっぱり言ったクレメントの目は、笑ってはいるが確固とした決断を語っている。と同時に、真意は全く伝えない謎の輝きを帯びていた。
本当に綺麗な目だなあ、などと、勝手に内心でのろけつつも、ジェイスは頭の隅で冷静にクレメントの性格を分析していた。
もしかしたら、クレメントは他人が苦手なのではなく信用していないのかもしれない。
そもそも、大国の王太子ならば、それ相応の近中や守役が常に付いている筈である。
それが一人も付いて居ないというのは、どう考えても、クレメントが従者達を煩がっているとしか思えない。
確かに、強大な魔力を有した魔導師である彼が側近らを巻いて城を抜け出すのは簡単だろうが、王太子という己の立場を考慮すれば、無断外出はしないのが得策なのは、馬鹿でも分かる。
明晰なクレメントが、その辺りを分からない筈はないのに、勝手な単独行動を取りたがるのは、他人不審としか考えようがない。
しかし、何故他人が信じられないのかと問い質したところで、この喰えない王太子は笑顔の煙幕で誤魔化して答えはしないだろう。

「……へいへい」
恐らく、自分も信用されていない一人だろう。
少し物悲しくなり、溜め息混じりに返事をして、ジェイスは玄関広間へと目を転じた。
広間は、今日も陳情に訪れる人々で混んでいた。
大半は地方の商人である。彼等は稼ぎ時のこの時期に、何とか中央の商業権を手に入れ、都で商いをしようと目論んでいるのだ。
「年に一度の新年の祭だってえのに、商売熱心なこった」
ジェイスは、半ばやけも手伝って商人根性を皮肉った。
「けど大変ですよね。地方の人々にとっては、この時期しか都に来られる機会は無いでしょうし」
「さすがに、よくご存じで」
暗に風来坊を咎めるジェイスの言い方を、クレメントは軽く受け流す。
「ロンダヌスも同じ様ですから」
大階段の一番下に四人並んだ兵士の間を通り、広間の中央の丸い卓近くまで来た時。
「キリアン伯っ！」
聞いた声に呼び止められて、ジェイスは人混みに目を凝らした。
商人の列を掻き分けてやって来たのは、昨日イリヤ神殿で出会った二人、パッド・ローエンとニーナミーナだった。

5

「どうしたんだ二人共？」
「王太子殿下、私達にも魔法石の奪還を手伝わせて下さいっ」
ニーナミーナの強い言葉に、ジェイス、シェイラ、クレメントは、顔を見合わせる。
「昨日、皆様が帰られた後でニーナミーナと話したんです。このまま盗られっ放しではイリヤ神殿の者として悔しいと」
パッドも、真剣な表情で言った。
「私達、騎士団長と神官長にそれぞれ許可は頂きました。殿下と伯爵がお許し頂けるなら……、いいえ、お許し頂けなくてもついて行きますっ」
「……おいおい、勝手な事言うなよ」
一筋縄では行かない賊を追うのに、手は多い方がいい。
騎士のパッドは戦力になるだろう。が、ニーナミーナはどうか？
確かに、イリヤの神官は皆戦士としての訓練を受けていると聞き及んでいる。しかし、明らかに修行途中の、しかも若い娘がどれ程の戦力になるのかは、全く疑問だ。
治癒魔法を掛ける程度にしか役に立たないのなら、足手まといである。
「相手は並大抵の奴じゃねえんだぞ。魔力は強いし。それに他にどんな仲間がいるかってのはまだ分からねえんだ。付いて来て、歯が立たないから帰りますって訳には行かねえぞ」
「分かっていますっ」
「ほんとかなぁ……」ジェイスは、わざと片眉を上げ、疑っている、という表情を作る。
「私たちだって、平素、それなりに訓練をしていますっ」
ニーナミーナが向きになる。
助け舟は、クレメントが出した。

「いいですよ、僕は」
いつものアルカイック・スマイルで、クレメントは二人を交互に見遣った。
「戦力は多い方がいいですし。それに、ニーナミーナさんは神官戦士でしょう？　イリヤの神官戦士は皆さん武勇に優れ勇猛果敢と聞いています」
知っていたのか、と、ジェイスはクレメントを見る。
クレメントはジェイスの心配を読んで、大丈夫です、と軽く頷く。
王太子が許可を出したので、二人はやったとばかりに手を叩き合った。
「では、僕達はこれから仲間という事になります」
「えっ？　私達殿下の従者じゃあ……？」
「今僕は自国に内緒で動いてますんで。身分は大っぴらに出来ないんです。と言う事で、ただの旅の仲間、として接して頂けたら有り難いです」
「え？　それで宜しいんですか？」
「ええ」と頷くクレメントに、ニーナミーナとパッドは、戸惑いの表情で互いを見合う。
「いいんじゃねえの？　そのほうが、先々気楽だし」
ジェイスは平静を装いつつ、クレメントとより緊密になれるチャンス、と内心でほくそ笑んだ。
シェイラも笑って頷いたので、後から来た二人は「それなら」と、同意した。

5（後書き）

ジェイス・・・大丈夫か？

6

「では、改めて自己紹介して頂いてよろしいですか？」
笑顔を深めて、クレメントは自分から始めた。
「僕はクレメント・エディン・ダルタニスです。一応魔導師です。以後はクレメントと呼んで頂いて結構です」
「俺はジェストロッド・キリアン・カーライズ。剣士だ。ジェイスでいい」
「私はシェイラ・ラトランス。傭兵だったけど、今はキリアン伯の従者よ。……って、仲間なら、従者じゃないわね」
付け加えたシェイラに、皆が軽く苦笑する。
ニーナミーナが、改まった顔で続いた。
「私はニーナミーナ・ワッツ。先程殿下……、じゃない、クレメントが言ったように、神官戦士よ。あと、イリヤ神特有の魔法も幾つか使えるわ」
それを聞いて、クレメントが銀の瞳を大きくした。
「では、『勇者の声』が唱えられますね？」
「何だそれ？」
分からない、と眉を顰めたジェイスに、パッドが説明した。
「『勇者の声』は、敵がその呪文を聞くと震え上がり、味方が聞くと勇気が出るという、特殊な呪文です。妖魔の咆哮と近いですね」
「咆哮？？？！」
この美人が妖魔のように吠えるのかと想像して、ジェイスは思わずのけ反る。
察したシェイラが、
「そんなことある訳ないでしょ。呪文よ、呪文」
と、長身を睨み上げた。
「『勇者の声』は妖魔にも効き目があります。カスタの古代遺跡の中は妖魔だらけですから、それを唱えられる人がいるのは助かりま

す」
「じゃあ、カスタの遺跡に行くの？」
ニーナミーナが、ぱっと顔を輝かせた。
「ええ、最終的には行かなければならないでしょう」
「うわあっ。私一度は行ってみたかったんだ。楽しみー」
「ニーナミーナ……。ピクニックじゃないんだよ」
嗜めたパッドが、最後に自己紹介した。
「私はパッド・ローエンです。イリヤ神殿警護の騎士です。よろしくお願いします」
堅いよ、と囁したジェイスに、シェイラは言い過ぎだと小言を言い、パッド本人は金色の頭を掻いた。
一通り挨拶をし終わり、一同は出口へと向かった。
門への道を行きながら、ニーナミーナがシェイラに尋ねる。
「これから何処へ？」
「フィルバディアよ。カスガの館に用事があるんですって」
「えー？　魔法石はもう無いのに？」
ニーナミーナの尤もな意見に、パッドもジェイスを見る。
ジェイスは溜め息混じりに、
「クレメントが行きたいってんだよ。言い出したら聞かないからな、このご仁は」
「……やっぱ、殿下なんだ」
小さく揶揄したニーナミーナを、クレメントは「ええ」と恐いにっこり顔で振り返った。
「ま、そういう事ですので、これから出発します」
先頭を切って歩き出したクレメントの後を、一同は溜め息をひとつ落としてついて行った。

6（後書き）

ほんと、ピクニックじゃありませんよー、ニーナミーナ（笑）

7

銀の水盆の表面に映るジェイス達の姿を、男はじっと見詰めていた。

「……キリアン伯、か」

彼等の姿は、『眼鏡』と呼ばれる魔法を掛けられた夏虫を通して、水に映し出されている。

男が現在居るのは、イリヤ神殿近くの廃墟となった商人の館。クレメントの予測通り、彼は王の大剣奪取の頃合いを狙ってランダスに留まっていた。

水を揺らせば消える魔法の景色を、男は水盤の縁を叩いて終わらせた。

「さて……、厄介な事になったな」

昨日からこの館に入り、『眼鏡』を使って城の内部を監視していたのだが、まさか魔法石を『囮』にするとは思わなかった。

しかも、預かったのはあのジェイス・キリアン伯である。

二十人斬りの騎士。

ジェイスがランダス一の剣豪であるのは、男の耳にも伝わっている。

生半な相手ではない。魔法を使うにしても、用意周到に行わなければこちらが殺られてしまう。

おまけに、ロンダヌスの王太子にして強大な魔力を持つクレメントまでが、同行している。

「大剣を、無理にでも急いで奪うべきか、否か……」

思案の目を、廃墟の破れた硝子窓へと移す。

その時、不意に目の前に少女の姿が現れた。

「??アーカイエス様」

黒髪に黒い瞳の幽鬼のような少女は、儚げな声で男を呼んだ。男??アーカイエスは赤い目を僅かに細める。

「ララか」
「はい」
少女は、やはり弱々しい声で答えた。
「昨日のウォーム神殿での魔法、よく出来た。ご苦労だったね」
ララは、実はロンダヌスに居る。昨日ウォーム神殿で、ジェイス達を犯人に仕立てようと神聖魔法を唱えたのは、彼女だった。
アーカイエスは、ララと遠距離でも会話出来るよう、自分の血を固めて作ったペンダントを彼女に持たせている。
ララがそれに向かって話せば、アーカイエスの眼前にぼんやりとだが少女が現れる。
ぼうっと霞むララは、心配そうな表情でアーカイエスを見詰めた。
「……本当に、あれで良かったのでしょうか？」
「何の、話だ？」
「七賢者のお一人、アルクスク大神官の魔法石を持ち出すなどと……。やはりしてはいけないことなのでは……」
「ララ」
アーカイエスは、殊更優しい声で言った。
「ファーレン神殿に帰りたければそうしなさい。神官長には私から手紙を書いておく」
「いいえっ」
だが、ララは強い声で否定した。
「申し訳ありませんっ、アーカイエス様っ。もう申しませんっ。ですから……っ」
「分かっている」
アーカイエスは薄く笑んだ。
「ところで、今何処にいるのかな？」
「ロレーヌの南区の宿屋におります。……私、これからどうすれば？」
「そうだね、もう少しでこちらの用が終わる。ロレーヌに行くのは後四、五日掛かるから、それまでそこの宿屋にいなさい。宿の名前

は？」
「川蝉亭です」
「分かった」
ララは深く頭を下げると、現れた時と同様唐突に消えた。
少女の残影を惜しむように、アーカイエスは暫し彼女の居た虚空に目線を留める。
「済まないな」
溜め息をひとつ落とし、脚の高い椅子から降りる。
「……あちらの思惑に乗ってやるか」
小さく呟くと、アーカイエスはゆっくりと部屋を出口へと横切った。

7（後書き）

魔法石の盗人にして、ノルン・アルフルの魔導師、アーカイエス。

やっと名前が出てきました・・・（汗）

8

ヴィードからフィルバディアまでは馬で小一時間である。王都の南門から真っすぐ南へ、五人は馬を進める。

陽が高くなり始め、朝は少し冷えていた風が蒸し暑さを含み始める。

街道を行く荷運びの男達が、首に掛けた布で汗を拭いている。

やがて、なだらかな林の丘を降りた辺りに街の跡らしき風景が見えて来た。

「ここが、フィルバディアですか……」

更に近付き、廃墟に焼け焦げた跡があるのを、クレメントは複雑な表情で見詰めた。

二百年前。

当時まだ少年であったティルス・アーバイン王は、炎の魔女ファーレン・レイムの凄まじい魔法の炎によって焼け落ちる城から、従者二人と共に逃げ延びた。

ファーレンの炎はフィルバディア城のみならず、王都の半分を舐め尽くしたという。

火に焼かれ、あるいは攻め寄せたアストランス兵に殺された人々の遺体は、累々と中央広場を埋めた。

生き残った人々は、家族親族の遺体を収容する暇も無く、ヴィードへと逃げ出した。

数日後、焼かれた街は、今度は国土を奪還するべく戻った王を助けたケイト・クリスグロフの水の魔法で、大量の水攻めに遭う。

駐屯していたアストランス兵の大半が流され、市の外れに集められていた市民の遺体は、水の勢いに千切れ、あちこちに散乱したという。

火と水。二つの強力な魔法によって荒らされた街は、もはや人が住めるまでに回復するには膨大な資金と時間が必要な有り様になっ

てしまった。
そのために、ティルス王は王都を捨てたのだ。
クレメントは、フィルバディアの廃墟を進みながら、改めて魔力の功罪を強く感じた。
ファーレンの魔法は無論罪だが、国を奪還するために必要だったケイトの魔法も、果たして本当に適切だったのだろうか……？
ここには、新年を祝う賑わいも、人の息遣いさえ感じられない。
夏草が、壊れた土塀の側から生え風に揺れるのを見遣り、ロンダヌスの王太子は深く溜め息をついた。
「どうした？」
やや後ろに付いていたジェイスが、彼の溜め息に気付いて声を掛けて来た。
「何か、気が重そうだな」
「いえ……」
クレメントは、薄く笑って首を振った。
「フィルバディアは、元の名をティリア・ミラと言ったそうですね」
「ああ。何でも古代語で『王の冠』って意味だってな」
「そうです。それ程美しい都だったのでしょう……」
今は見る影も無いが。
クレメントが言わなかった言葉を、ニーナミーナが言った。
「今は惨澹たるものね。当時の人達の苦悩が伝わる気がするわ」
王都としての役割を捨て二百年。
ほぼ灰燼と化した街は、それでもここ四、五十年で周辺から人々が集まり、僅かだが街の一部に住み着いている。
北門から廃墟の中を歩いて来た彼等は、そんな人々が建てた新しい家並みの前を通る。
粗末な家々の前に、それでもイリヤの旗が立てられているのに、クレメントは少しほっとした。

9

そこから程なくして、カスガの館へ着いた。
館は、思っていたよりもこじんまりとした建物だった。
フィルバディアの焼けた煉瓦を再利用したらしい壁は、色もまちまちで、所々欠けて落ちている。
窓の数から察して部屋数は僅かに四部屋、かの有名な七賢者の館とは思えないくらい小さい。
一行は馬を降り、館の前の馬繋ぎに手綱を結わえた。
正面玄関には兵士が二人と騎士が一人、警備に当たっている。
ジェイスとシェイラが騎士に近付いた。
「中を入れて貰えるか？」
騎士はジェイスの顔を見て、相手が誰だかすぐに分かったようである。快く承諾した。
館は、玄関ホールなどはなく、扉を開けるとすぐに書斎だった。
壁一面が書棚となっていて、ぎっしりと魔道書やその他の書物や巻いた羊皮紙で埋まっている。
入り口の正面の書棚の前に大きな文机があり、その上にも書物が幾つか乗っていたのだろうが、今は床に転がっていた。
床に散乱していたのは、書物だけではなかった。
様々な書類、筆記用具、引き出し、置物などまでが、壊れたり転がったりしている。
「こりゃ凄いな」
足の踏み場も無い程に荒れた部屋に、全員が驚いた。
が、一番驚いたのは警備の騎士だった。
「これは一体……？」
「恐らく盗人でも入ったんだろうさ」
ジェイスの言葉に、パッドと同じくらいの年頃の騎士は首を振った。

「そんな事はあり得ません。我々が毎日毎晩、周囲の警護に当たっておりますから。賊が忍び込む物音や人影などが見えたら、絶対に見逃したりはしませんっ！」
「では、魔法で忍び込んだのでしょう」
クレメントは、部屋の周囲をゆっくり見回した。案の定、リトの魔法陣に残っていたものと同じ魔力の気配が、僅かに残っている。
「この館には魔法防御が一切掛かっていませんから、魔力のある魔導師なら簡単に入れます。そして、僕達が追っている人物も、強大な魔力を持っているであろう、魔導師です」
「そんな魔導師が……、どうしてこの館に？」
「探し物は、魔法石よ」
ニーナミーナが腰に手を当てる。
「でも、これだけ探し回っても、ここには無かったって訳ね」
「しかし、手掛かりは見付けたようですね。……そこに」
クレメントは、文机の隣の、机と同じ高さのチェストの側へ寄った。
チェストの上には、水の入った銀の水盆が置かれ、その中に大人の拳大の大きさの水晶球が入っている。
クレメントは水盤の上に手を翳した。と、白い光が、水晶球から発する。
光の一筋が立ち上がり、横に広がると、灰色のローブを着た中年の魔導師の姿になった。
水晶に閉じ込められていたカスガの影は、にやりと痩せた顔を歪ませる。
「この水晶の魔法書を見る事が出来たあんたは、恐らく相当の魔力を持ってるだろう。そこで、あんたに頼みがある。イリヤ神殿にある私の魔法石『颯』を、カスタの遺跡へ持って行って欲しい。
あれは、持ち出すべきではなかった。何のために作られたのかもよくわからないのに、我等は無謀にもあの石を砕いてしまった。そのために無用の戦いも起きた。

私の石ひとつ返したところでどうにもなるものではないが、どうか、出来れば願いを聞いてくれ。石は、神官長の執務室の隣にあるらしい。
カスタ遺跡で魔法石が置かれていたのは、遺跡中心から東に少し寄った、地下通路に面した一部屋だ。どうか、頼む。
……私は、これからファーレンに会いに行く。さらばだ」
ふっと、カスガの影が消えた。
「これを、賊も見たって事か……」
ジェイスの呟きに、クレメントが「そうですね」と頷く。
「どうして見終わったあと壊さなかったかは謎ですが。でもこれで、僕も知りたかった情報が聞けました」
「情報って？」
「魔法石が、元々カスタの遺跡のどの辺りにあったか、です。地下通路、という事は、ライズワースは地下に呪文発動の迷宮を造ったという事になります」
「ライズワースの地下迷宮って、何？」
初耳な話に、顔の真ん中に大きなハテナをくっつけているニーナミーナに、シェイラは片目を瞑った。
「後で教えてあげる」

9（後書き）

ライズワースの地下迷宮。

核心は、まだまだ先です（汗）

10

クレメントはもう一度水盤の上に手を翳すと、今度は左手の人さし指と中指を口元立て、呪文を唱え始めた。
「……永き役目を終え元の姿に戻れ。還元」
水晶から先程の光が再び立ち上る。が、今度は強く光ったと思った途端、光は周囲に霧散した。
目の裏に残る光の残像を振り払おうと、ジェイスは頭を強く一振りする。
「……何、やったんだ？」
「カスガの魔法を解きました。こうすれば、いつかここに来るかもしれない、これを見る事の出来る魔導師が、古い情報に惑わされずに済みます」
さて行きましょう、というクレメントの言葉で、一同は館の外に出た。
賊が内部を荒らした事を、王城とイリヤ神殿に伝えるよう警備の騎士に言い、彼等はそれぞれ馬に乗った。
「さて、いよいよロンダヌス。カスタ遺跡か」
ジェイスは馬首を戻り道に向ける。
「いえ、カスタへ行く前に一度ロレーヌへ戻ります」
「また何で？」
「僕は、現在家出中の身なので」
クレメントは苦笑する。
ジェイスは「あ、そうか」と頭を掻いた。
「一応親父さん、じゃない、ロンダヌス国王陛下に事のあらましを伝えないと。って、俺らも陛下に謁見すんのか？　……めんどー」
ジェイスっ、と、シェイラが睨む。
クレメントは、口元を拳で押さえつつ、笑い声で説明した。
「それもそうですが、カスタの通行証を貰うのが第一です」

「へ？　カスタって、入るのに通行証が要るの？」
ニーナミーナが目を丸くする。
「腕に覚えがあれば、誰でも入れるんだと思ってたー」
「そうは行きません。極めて危険な場所ですので、万が一の場合、誰が入っていたのか確認が取れませんと」
「結構、面倒なのね」とは、シェイラ。
「まあ。通行証を発行してもらう時に、行くパーティの力量も調べられます。でもこのメンバーならそれは何も問題ないでしょう」
「ところで、ロンダヌスまでのコースは？」
パッドが後ろから尋ねる。
「そうですね。……最短コースは山越えですか」
「ええっ？　コルーガ山地は妖魔の巣よっ？」
ニーナミーナが抗議する。
「アストランス南道を通っても妖魔は出るぜ。同じなら、山超えた方が確かに早い」
「そんな……」
「大体、カスタ遺跡にぜひ行きたいって喜んだ人が、街道の妖魔くらいでどうしてびびるの？」
眉間に皺を寄せ、ずいっ、と顔を近付けて来たシェイラに、ニーナミーナはしどろもどろに言い訳する。
「それはぁ……、確かに、カスタも妖魔の巣だけど……。そっ、それはそれよ。出会わない方法があるならその方がよっぽどいいじゃない？」
「あっそう。嫌ならいいわよ？　無理に一緒に来いとは言わないから」
シェイラが、渋面を揶揄い笑いに変える。ニーナミーナは、ぷっ、と、膨れっ面になった。
「いいわよう、行けばいいんでしょっ、行けばっ。何よっ、ボガードの一匹や二匹、すぐに頭かち割ってやるわよっ」
シェイラが吹き出す。ジェイスも、がははと笑い声を上げた。

笑いを堪えつつ、クレメントが言った。
「じゃあ、山越えで決まりという事で。出発しましょう」

１０（後書き）

ニーナミーナ、思いっ切りボガードの頭をかち割りそうです（苦笑）

1

コルーガ山地は、パンドール大陸の中央を東西に横切る巨大な山岳地帯である。
山地には、四つの公国と東の国フィアス連合国の一部、山岳民族の村が点在している。
街道と呼べる道は、ランダスからアストランスの南西部の都市である森の新都を通りフィアスの首都へ入るものと、レク、サゼ両公国を抜け、やはりフィアスへと向かうものの二本である。
ランダスからレクを通りロンダヌスへ抜ける道は、あるにはあるが非常に険しい山道の上に、森林が深く妖魔の出没が頻繁である。
この山道を抜けるには、余程の剣の腕か強い魔力を持つ者でなければ無理だ。
さらに、山岳民族、特に特殊な術を操るというサッド族の道案内は、絶対に必要である。
カスガの館から馬で二日、五人がレクの首都ミルガルトの駅舎に着いたのは、もう夕方だった。
レク、サゼといったコルーガの公国は、どれも祖先に神を持たない。そのため、新年の祭の間、城や民家に掲げられるのは、神々の旗ではなくそれぞれの国の国旗である。
しかしそれも、昨日の夏節祭期間終了と共に外されていた。
ジェイス達は駅舎近くの大きな宿屋に部屋を取った。
宿の一階は、どの国の場合もそうだが食堂兼居酒屋である。ジェイス一行もそこへ夕食を食べに降りた。
「サッド族が来てればいいんだけどなぁ」
ジェイスは、仄暗いランプの明かりの中、宿の泊まり客や一杯飲みに来た近所の者でごった返す酒場を何気なく見回す。
近くに五人分の席を見付けて確保したパッドが、「こっちです」と声を掛けた。

神殿での案内役の時もそうだったが、パッドは細かい所に気が回る。
ジェイスは、クレメントに椅子を引き座らせると、自分はその隣へ腰を下ろした。
ジェイスの正面に座る格好になったパッドが、おずおずと尋ねてきた。
「ジェイス……、さんは、サッド族と会った事があるんですか？」
どうにも改まらない若い騎士の物言いに、ジェイスは苦笑した。
「だから、ジェイスでいいって。……ああ、サッド族には、以前親父に付いて山越えした時に道案内を頼んだんだ。俺がまだ十一かそこらの時だけどな」
「何故、山越えを？」
クレメントが訊く。
「あの時は確か、ロンダヌスへ行くため？？今回とおんなじだなあ、王妃様が亡くなったって事で、その弔問の使者に俺の親父が立ったんだ」
ジェイスは、そこでそれがクレメントの実母である事に思い至る。申し訳ない話をしたかと、彼はちらりとロンダヌスの王太子の顔を見た。
が、ジェイスの心配に反して、クレメントは至極淡々とした面持ちをしていた。
「……母が亡くなったのは、僕が九歳の時でした。でもお気遣い無く。割と情の薄い親子関係でしたので、当時も今もそんなに悲しくはありません」
それより、と、ジェイスが自分の過去を深く尋ねるより先に、クレメントは話題を戻す。
「山越えするには、やはりサッド族の方に案内をお願いした方がいいのですか？」
「う？　ああ。山地には平野の倍以上の魔物が出る。ボガードにユガー、それにライカンスロープまで。人狼は厄介だぜ、力は強いし

噛まれるし。おまけに動きが速い。サッド族はそれぞれ妖魔を従えていて、そいつらがライカンスロープなんかをやっつける。凄くつええぞ、その妖魔は」
「妖魔使い、ですか……」
クレメントが思案気に俯く。
「サッド賊は山の獣を捕って、その毛皮や角を街で売る。だからレク辺りにはしょっちゅう来てるって言ってたんだけどな……」
どうやら、今はいないようである。
もう一度見回して、ジェイスは溜め息をついた。

2

「まあ、仕方ねえな。俺らの力だけでロンダヌスまで行くしか」
「お兄さん達、山越えをする積もりなのかい？」
不意に、彼等の斜め前に座っていた商隊の一人が声を掛けて来た。
荷を守る傭兵らしい男に、ジェイスは「ああ」と愛想良く笑った。
「ちょいと急ぎでさ」
「止めときな。この間までサッドの連中がレクに来てたんだが、言ってたぜ。夏に入ってからどういう訳か妖魔の数が急に増えたって」
「ほんとかよ」
ジェイスは眉を寄せた。
「ああ。他にも、この前ロンダヌスから来たって商隊に聞いたんだが、南回廊を抜けた辺りでボガードの大群に出っ食わして、案内のサッドの妖魔二体が餌食になったってよ。サッドの妖魔っつったら強いので有名じゃねえか。それがボガードに襲われて歯が立たないってんだからただ事じゃねえ。商隊も用心していつもの倍の傭兵を連れてたんだが、半分がやっぱり妖魔に殺られたってよ」
「多いだけじゃなくて、妖魔が狂暴化しているんでしょうかね……」
柳眉を寄せたクレメントに、話した男が「そうみてえだよ」と頷いた。
「それで、サッド族がレクに来ていないのか……」
パッドが深刻な表情で呟く。
「そんな場所に突っ込んでいって、大丈夫なんですか？」
「何とも、言えねえな」
若い騎士の心配に、ジェイスは首を振る。
「確かに、回り道でもアストランスに抜けてフィアスから入った方が得策かもな」
「そう、ですね。急がば回れ、とも言いますし」クレメントも、渋々という表情で同意する。

「えっ？　じゃあ山越え止めるの？」
初めから反対していたニーナミーナの顔がぱっと明るくなる。
「今聞いた状況ですと、フィアス回りをした方が安全のようです」
「やったあっ！　じゃ、そうと決まれば腹拵えねっ。　あ、すいませーんっ！」
彼女はカウンターの店員を大声で呼び付ける。
慌ててやって来た店員から羊皮紙のメニューを受け取ると、上から一つ飛ばしに3分の1をさっさと注文した。
「よっく食べるわねえ」
呆れるシェイラにメニューを渡しながら、ニーナミーナはさらりと言った。
「腹が減っては戦は出来ない、よ。ね、ジェイス？」
「どうして俺に振るんだっ？」
「だって、この中で私の次に食べるのって、ジェイスじゃない？」
「おまえ～～、それが若い娘の言う台詞かよ～～」
呆れ半分、脱力して食卓に突っ伏すジェイスを、クレメントとシェイラが笑う。
「ニーナミーナっ！」
パッドが嗜めるが、当のニーナミーナは涼しい顔で、再びメニューに目を通していた。

2（後書き）

ニーナミーナは大食い娘です（苦笑）
モデルがいたりしますが、内緒です（本人に怒られるし^^;）

3

その夜、クレメントは昔よく見ていた夢の中に、久々に迷い込んだ。

……その扉は、どんなに叩いても開く事はない。

分かっているのに、でもその前に立ってしまう。

???母上、お加減が良くないと伺いました。クレメントです、開けて下さい。

小さな自分の手には、離宮の庭で咲いた野の花が握られている。

???母上。

天窓の明かりで仄明るい奥殿の廊下には、王妃の部屋から漏れる薬湯のにおいが漂っている。

しばらく待っても、中からの返事は無い。

クレメントは、背の高い白い扉を見上げる。

???はは……、うえ。

力無くもう一度呼び掛けた時、王妃付きの侍女頭の、震える声がした。

???離宮にお戻り下さい。王妃様は殿下にはお会いになりたくないと、申されております。

???でも……

???何度お出でになられても、王妃様はお会いにはなられません。どうか、離宮にお戻りを。

花が、手から滑り落ちる。

分かっていること、分かって、いたこと。

母上は、僕がお嫌いなんだ。魔法が使えるから。

魔力が強いから。みんな、壊してしまう、から……。

なら、僕の魔力が無くなれば、母上は僕に会って下さいますか？

僕を抱き締めて下さいますか？　妹と同じように、頬にキスして下さいますか？

笑い掛けて、下さいますか……？
母上、ははうえ、ハハウエ？？
若緑の髪が、風も無いのに緩く天井へ向けて逆立つ。
溢れる悲しみが、白い扉の表面に無数の亀裂を走らせる。やがて、軋む音と共に、白い扉が破壊される。
中から女達の悲鳴がする。
薬湯のにおいの立ちこめる室内に、凄まじい気流が流れ込む。
王妃の、母の金切り声が響く。
？？化け物っ！　わたくしは、そなたのような化け物を産んだ覚えはありませんっ！
化け物。
僕は化け物なんだ。僕は、魔力の化け物なんだ。
恐怖に見開かれた、母の銀の目が自分を見詰めている。
？？何処かへ消えてっ！
母が、柔らかな羽枕を自分に向かって投げ付ける。気流が邪魔をして、枕は寝台の下へと落ちる。
？？兄上っ、やめてっ！
ユフィニアの声がした。小さな妹が、果敢にも自分を止めにやって来る。小さな両手が、肩に掛かる。
？？やめて下さいっ！　みんな死んでしまうっ！
？？ユフィニア。
クレメントは、自分の頬に涙が伝っているのを感じて目が覚めた。
手で触ると、枕まで濡れている。
「何で今更……」
呟いて苦笑すると、彼は上体を起こした。
ぎしりと、古い木製の寝台が重みで軋む。
月明かりがあるのだろうか、宿屋の窓から薄い明かりが入って来ている。
三人部屋の、一番奥の寝台に寝ていたクレメントは、隣の寝台をそっと覗く。

パッドは、彼が起き上がったのには全く気付かずぐっすり眠っている。
ほっと息を吐いた時。
向こう隣の寝台がもそりと動いた。
「……どうしたんだ？」
低い声で、ジェイスが尋ねた。
薄明かりに浮かぶ大柄な身体が、起き上がった。

4

ジェイスは寝台を滑るように降りると、クレメントの側へやって来た。
「眠れないのか？」
「あなたこそ……。起こしてしまいましたか？」
「いや」
ジェイスは短く返すと、クレメントの寝台の端に座った。
「昔の、夢を見ててさ」
「奇遇ですね。僕もです」
ジェイスは、王太子の美しい貌を覗くように「どんな？」と尋ねた。
「母の、夢です。……ここ何年も見なかったのに、昼間話に出たからでしょうか」
「……悲しい夢、だったんだ？」
どうしてそんな事を聞くのか、と僅かに眉を寄せるクレメントの頬に、長く太い指が触れた。
「泣いた跡が、あるぜ？」
優しく暖かい感触に、愛しさと安堵が沸き上がる。と同時に、何故かまた涙が出そうになる。
クレメントは、頬をそっと撫でる男の指を、細い指で止めた。
「涙なんて、もう出ないと思っていましたのに」
遠い昔に忘れたと思っていた。
母に愛されたいと願い、だがそれは、ついに叶えられなかった。
臨終の際にあっても、母は自分に会おうとはしなかった。
母が亡くなって王宮に呼ばれたのは、母の身体が葬儀の棺に移され、葬祭殿に安置された後だった。
棺に納まった、蝋人形のような母を見たその時、幼いクレメントの心の中で、母親への思慕は音を立てて崩れた。

それ以来、泣いたことなどついぞ無かったのに。
あの夢は、母が亡くなったと同時に見なくなっていたのに。
「悲しい事は、いくつになっても悲しいんじゃねえの？　何なら話してみな。俺でよけりゃ聞くぜ」
ジェイスの言葉に、はっとする。
そうなのかもしれない。忘れていたふりをしていただけで、心の奥では、今でも自分は母の愛情を探して泣いているのかもしれない。
空しさが、心臓を掠める気がした。
「……いいえ。もう大丈夫です。ご心配お掛けしました」
薄く微笑んで、手を離す。
本当にもう、昔の事なのだ。今、誰かに語ったところで、失われた者への気持ちは行き場など無い。
ジェイスは、何か言いたげにクレメントの頬に置いた手を少し彷徨わせたが、黙って引っ込めた。
「おやすみ」
赤茶の髪を揺らして、偉丈夫が立ち上がる。
「おやすみなさい」
と、返して、クレメントは寝台へ横たわった。
ジェイスに触れられた頬が、ほんの少しだけ、熱い。
指先でその部分に触りながら、クレメントは、ジェイスへの愛しさが亡き母への悲しみをゆっくりと押し流していくのを感じた。
安堵感が、心に広がる。
目を閉じたクレメントは、二度と母の夢は見なかった。

4（後書き）

クレメントが泣いているのに・・・！！
恋する男としては絶好のチャンスっ！！　のはずが。
ジェイス、以外と根性無し、かもです（汗）

5

翌朝。
一行は出立前の買い物にとミルガルトの市場へ出た。
山越えは諦めたが、旅はまだまだ続く。
装備を点検して、使った分の食料と薬を買い足す事にした。
携帯食料の買い出しにはパッドとニーナミーナが、残り三人は薬草を買いに薬屋へと向かった。
何処の街の薬屋も同じだが、壁という壁は、天井に届くまでの高い引き出し棚に覆われ、床には幾つもの素焼きの大壺が置かれている。
鼻をつく薬草のにおい??ジェイスはこのにおいが嫌いだった。
幼い時に亡くなった母の部屋に、何時も立ち込めていたにおいだった。
先代のカーライズ公は女房運が悪いと言われた。
兄二人の実母も、ジェイスの母である後妻の、先代国王の妹姫も、嫁いで十年経たぬうちに病で亡くした。
薄暗い病人の部屋と薬草のにおい、そして、父の持つ謹厳な雰囲気。
幼い頃、実家の館を支配していた、馴染めなかった陰鬱な空気を思い起こし、ジェイスは思わず顔を顰める。
事情を知っているシェイラが、「外で待ってれば?」と小さく言った。
「いや、いい」
「どうかしました?」
気付いたクレメントが寄って来る。
息も掛からんばかりの至近距離から見上げてくる銀の瞳に、ジェイスの心音が高鳴る。
そう言えば、昨夜クレメントも母親の夢を見たと言っていた。

月明かりに、泣いた跡が白い頬にくっきり残っているのが分かった。
まるで、雨に打ちひしがれた百合の花のようだった。
萎れた表情が切なくて、愛しくて、我慢できずに頬に触れてしまった。
自分が、この美貌の王太子にかなりぞっこんである自覚はもうとっくにあったが、相当な深みにまで嵌まっているのに、今更ながら驚いた。
昨夜はそれでも、頬には触れたが唇を奪うまでは、どうにか思い留まった。
惚れた相手に手も出せないとは、男として意気地のないことこの上無いのだが、しかし相手は男だぞ、とジェイスは遅蒔きながら、内心自分に言い聞かせる。
惚れて報われる相手ではない。ロンダヌスの王太子ではなおさらだ。
諦めろ、と、己の『恋心』に命令する。
だが、自分の想いを、人間そう簡単に操縦するのは難しい。
まして、『恋愛』では。
こうして間近にクレメントと接していると、やはりどぎまぎしてしまう。
ジェイスが一人勝手に赤くなったその時、店の奥にいた二人の男が、入り口へと出て来た。
奇妙な出で立ちの男達である。レンと呼ばれる、鹿に似た動物の毛皮で出来た帽子を被り、腰には鮮やかな色の毛織物の腰当てを付けている。
ボウガンを背に背負っているが、それも普通の形のものとは違い、極端に握りの部分が細い。
ジェイスには、この不思議な格好の二人が、すぐにサッド族であると分かった。
目的のものを見付ければ、例え恋に波立っていようと心を瞬時に

平静に整えられるのは、戦士の性といえる。
ジェイスは、店を出ようとする二人を、急いで呼び止めた。
「よお、あんた達、サッドの人だよな？」
二人の男は、足を止め、何事かという表情で振り向いた。
「山の妖魔が増えて、レクにはサッドは来ていないって聞いたんだが？」
ジェイスは、黒い毛皮帽を被った、年嵩の方の男に話しかけた。
男は、赤毛の大男を怪訝そうに見上げる。
「……確かに、俺達以外のサッド族はレクには来ていない。俺達はハイライ（フィアス属領）を回って、サゼからレクへ入った。ロンダヌスへ直接通じている山道は、今は妖魔だらけで俺達でも通れない」
「それは昨夜聞いたが……」よくない知らせの繰り返しを聞き、ジェイスは、やや重い気持ちで腕を組んだ。
もう一人の、灰茶の毛の帽子を被った男が口を開いた。
「ハイライでさえ危険だ。サゼは、アストランスとフィアスの国境に、警護の騎士団を置いている」

5（後書き）

ジェイス、クレメントへの想いで、かなりジタバタしています（笑）

だから、男だってば……？

6

「なんてこった」ジェイスは溜め息をついた。
予定していた道程、サゼからアストランスの森の新都までは、コルーガ山地の裾野でなだらかだが、森が深く、山地ほどではないが妖魔が多く出没する。
そのルートより、さらに妖魔の少ないハイライへの道が危険と言うのならば、取るべき方法はひとつしかない。
しかし。
「ここからランダスへ引き返すってのは、どうにも時間が掛かり過ぎだな」
「そうですねえ」
クレメントが腕を組む。
「何とか、なりませんかねえ」
クレメントが、サッド族の男達をちらりと見た。
灰茶の毛の帽子の男は、クレメントの意図に気付き、渋面を作った。
「おまえ達は山道を通る積もりか？　死ぬ気か？」
「どうしても、急ぎロンダヌスへ行く用があるんです。道案内をお願い出来ませんか？」
「駄目だ」
男は手を振った。
「サッドでさえ通るのが大変なんだ。慣れない者を連れてなど、無理だ」
「そこを何とか……」
「クレメント」
ジェイスが止める。
「彼等が駄目と言ったら、駄目だ。他の方法を考えよう」
「そう、ですか……」

いかにも残念そうに、クレメントは項垂れる。
男とはいえ絶世の美人が悲しげに俯く姿に心を動かされたのか、年嵩の男が言った。
「……リムなら、道案内を出来るかもしれない」
「リム？」
「岩ノ上部落の長老の孫だ。年は若いが強いガーディアンを持っている」
「ガーディアン……？」
シェイラが聞き返した。
「俺達は妖魔と戦うためにガーディアンを使う。ガーディアンは使う者の気力によって強さが違う。リムのガーディアン以上のは、俺達の中では見た事が無い」
「そのリムさんには、何処へ行けば会えますか？」
だが、男達は分からないと答えた。
「サッドは獲物を求めて山の中を彷徨う。長い時は三か月、四か月と。今、リムが何処を歩いているのかは、山の精霊でも分からない」
サッド族の男達はそれだけ言うと、額に人さし指と中指を当てる、彼等独特の挨拶をして店を出て行った。
「岩ノ上部落のリム……か」
男達の背中を見送りながら、ジェイスは呟いた。
「けど、以外と旨く情報が入りましたね」
先程の打ち萎れた表情とは打って変わって、いつもの微笑で見上げてくるクレメントを、ジェイスは驚いて見る。
「何だって？」
「妖魔がどれくらい増えているのかは、サッド族の動きで分かりました。彼等がハイライ回りをする程となれば、相当な数です。けど、中にはそれをものともしないサッド族もいる、と。という事は、対処の仕様はあるという事です」
「って言ってもなあ、あっちは山の専門家、こっちはド素人だぜ？」
ジェイスの苦言に、クレメントは真面目な顔で頷く。

「ええ、確かに。出来れば妖魔の大群なんかに出くわしたくはありません」
「こっちの都合通りにはいかんさ。……サッド一のガーディアンの持ち主、か」
「何処かで、何とか会えませんかね……」
「さあな。奴らが無理ってんだから、無理かもな。もし、山中の街道で行き会えたとしたら、それこそウォーム神のご加護かもよ」
二人の話が一区切りついたのを見計らって、シェイラが店の奥へと動く。
「とにかく、買い物済ませましょ。フィアスも危険だっていうなら、なおさら薬は必要だし」
冷静な提案に、男二人は黙って頷いた。

7

レクから公国ミュシャへ少し寄った辺りは、コルーガ山地でも一番魔物が多く出没する。この周辺は、切り立った岩場が多く妖魔が住処とし易い洞窟が幾つもある。

妖魔が出没するので、付近には獣の気配がない。

一際突出した岩場の上に、アーカイエスは立っていた。

山の天候は変わり易い。つい先程まで薄曇りであったのに、今は雷雲が上空を覆い始めている。

「……さっさと済ませた方がいいな」

アーカイエスは、黒雲の掛かり始めた空を見上げ、呟く。

岩場の下は針葉樹と照葉樹の入り交じった森である。

陽の光りが差し込まぬ深い森には、昼間でもボガードやユガーが徘徊している。

足下へ目を転じたアーカイエスは、危険が潜む緑の海の中へ、微塵の躊躇いも見せずひらりと身を躍らせた。

落下しながら浮遊の魔法を唱える。長身は、見えない羽に支えられ、ゆっくりと森の底へと降りる。

以前から時間を見付けては、山中で探し物をしていた。彼等ノルン・アルフルが近くに来ると、妖魔は闇の『気』に反応して活発になる。

昼には出歩かぬボガードやユガーが一日中徘徊するようになるのも、そのせいだ。

予想した通り、彼が降り立つとすぐに薮の中から妖魔が数匹、躍り出て来た。

手に小剣を持ったボガードは、威嚇の咆哮をしながらアーカイエスに迫る。

妖魔にとっては、人間もノルン・アルフルも同じ『獲物』でしかない。

妖魔の鳴き声は、人間に恐怖を抱かせる。
だが、ノルン・アルフルの血を濃く受け継いだアーカイエスには、彼等の咆哮など小鳥のさえずりに等かった。
自分達の声に寸分も怯まないどころか、余裕の笑みさえ浮かべている無謀な人間に苛立ち、ボガードが一斉に襲い掛かる。
小剣の切っ先がアーカイエスの身体に届くかと思われた瞬間。
「??火霊召還」
妖魔達の眼前に炎の楯が出現した。
「おまえ達の相手をしている暇は、私には無い」
ボガード達は、突然現れた炎に怯む。アーカイエスは指を鳴らすと、火の精霊に妖魔達を襲わせた。
楯がうねり、たちまちボガード達をその舌に巻き込む。
火だるまとなり、悲鳴を上げて地に転がる妖魔を無視して、アーカイエスは奥の薮へと入って行く。
そこには、先鋒の戦いの様子を窺っていたボガードがまだ数匹、隠れていた。
アーカイエスが近付くと、彼等は一目散に逃げ出そうと後ろを向いた。
「止まれっ。……主の命に従え」
術ではない。ノルン・アルフルの身体に流れるノルオールの血が持つ圧倒的な『闇』の気が、妖魔の動作を一言で拘束する。
ボガード達は己の意志に反し、その場に留まる。
アーカイエスは、醜悪な顔を更に醜く歪めて怯えるボガードに、満足げな笑みを見せた。
「いい子達だ。??では、おまえ達がこの世界に最初に現れた場所へ、連れて行って貰おう」
ゆっくりと、魔導師の呪縛を受けた妖魔が歩き出す。
ボガード達が彼を連れて行った場所は、薮からそんなに離れた所ではなかった。
そこは巨大な一枚岩をくり抜いた、古い祠だった。

祠の両開きの扉は片側が壊され、中から妖魔の呻き声が聞こえて来る。
妖魔が最近出入りしたのが、正面にびっしり生えた蔓性の植物が引き千切られた跡が、まだ新しいことで分かる。
アーカイエスはボガード達をその場に待たせ、蔓を潜った。
祠の中へ入ると、奥から淡赤色の光が漏れて来ている。黒い魔導師はその光に薄く笑った。
「やっと探し当てた。これで、我が積年の望みが叶う」
これまで訪れた山中の祠には、彼の探すものは無かったり、あっても既に役に立たなくなっていたりした。
完全に使用出来るものとして、これは最後かもしれない。
「失敗は、許されんな……」
呟いて、アーカイエスはゆっくりと光の方へと進んで行った。

8

レクからサゼを抜けフィアス属領ハイライへと至る道は、山道ではあるがよく整備されている。
馬で急げるだけ急いでレクとサゼを通過すると、いよいよハイライへと入る道になった。
大きな街があり森も切り開かれているサゼやレクとは違い、ハイライは深い森の中に小さな町や村が点在している。
良質の木材を育て輸出して生計を立てているハイライは、なるべく森林面積を大きく取るため、町を最小限の大きさに止めているのだ。
樹木が多く、樹影が濃ければ、妖魔の出没頻度は必然的に高まる。
ボガードなどは、深い薮や灌木を隠れ蓑にする。
そういった妖魔の出没を抑えるために、ハイライの林業者は、下草苅りや間伐はまめに行っていた。
下草や灌木の手入れは、森の木を大きく育てるためにも必要だ。
「こっから先は徒歩で行こう」
ジェイスの提案で、サゼ最後の駅舎で一行は馬を降りた。
乗馬で妖魔に襲われた場合、応戦するより先に恐怖で暴れ出す馬の背から落ちる方が恐い。
国境に到達すると、サッドの男達が言っていた通り、サゼの騎士団に出くわした。
「キリアン伯っ！」
小さな監視小屋の周辺に集まっていた騎士の一人が、ジェイスを見付けて駆け寄って来た。
サゼは、古くからランダスとは親密な国である。
伝説となったティルス王の母も、当時のサゼ大公の姉であった。
そういった縁で、両国は互いの国情に非常に詳しい。
駆け寄って来た騎士と、ジェイスは特に顔見知りではない。が、

サゼの騎士ならランダスの騎士団とは頻繁に交流があるので、何処かで出会っているのだろう。
「どちらに行かれるのですか？」
髭面の屈強そうな騎士は、心配そうに尋ねる。
「ここから先は危険です。最近、妖魔が普段の倍以上出没するようになって？？」
「ああ、そのことならレクでも聞いた。でも、ちっと急ぎの用なんだ」
「しかし……」
「通行止めを、しているのですか？」
横からのクレメントの質問に、騎士は「いいえ」と首を振った。
「特には。しかし危険な事は通行人に話しています。出来れば引き返して頂きたいと」
「それは出来ねえな」
「そうですか……。ならばくれぐれもご用心下さい」
騎士は一礼して監視小屋へ戻った。
ジェイス達は街道へ戻り、ハイライへ入った。
道は急に細くなり、沿道に巨木が並ぶようになる。
「すっごい。サゼとは全く違うわね」
ニーナミーナが、迫るように生えている巨木を見上げながら言った。
「この道を馬で走るのは、ちょっと勇気がいるわね」
「荷物を運ぶのも一苦労だな。これだけ道がでこぼこだと」
ジェイスも、道を横切る太い木の根に、感心すると同時に困惑する。
「……それにしても、大きな木ねえ」
「ニーナミーナ、あんまり上ばかり見てると、木の根に躓くよ」
心配そうに彼女を振り返るパッドが、逆に木の根に足を取られる。
「おっと」
隣を歩いていたジェイスが、素早く青年の腕を掴む。

「あっ、すいませ……」
「なあによ、私よりパッドの方が危ないじゃない」
黙って見ていたシェイラとクレメントが、揃って苦笑した。

9

昼近くまで歩いて、一行は街道脇に適当な広さの空き地を見付けて休憩した。
夏だと言うのに、深い森の中は初秋のように肌寒い。クレメントは背負っていた背嚢の中から、外套を引っ張り出して肩に掛けた。
「火、熾そうか？」
訊いたジェイスに、「いえ」と首を振った。
「風邪引いたらまずいだろ」
「そこまで寒くはありませんから。？？それよりジェイス、ひとつ訊いていいですか？」
「なんだ？」
「ミルガルトの薬屋で、本当は中へ入るの、嫌だったんじゃありませんか？」
唐突に五日も前の事を言われ、ジェイスは目を丸くする。
「何でいまさらそんな事、訊くんだ？」
「気になっていたんですけど、あなたにお訊ねする機会がなかったんです」
「随分とまぁ……、しつこく気にしてたもんだなあ」
「すいません、どうも性分で。一度気になると忘れられなくなるんです。？？それで、父にも母にも嫌われました」
クレメントがにっこり笑顔で言うのに釣られ、ジェイスはあっはっは、と大声で笑った。
「怒られたんだ？」
「ええ、父に。元々母とはあまり口を利きませんでしたから」
その言葉で、ジェイスは重大な事を思い出した。
「……そう言えば、母上との間にはあまり愛情が無かったって、この間言ってたけど……」
クレメントは微笑んだまま「ええ」と言った。

「口利いて無かったって、どのくらい？」
「そうですねえ、年に四、五回くらいは喋りましたよ。それでも」
「四、五回っ？」
素っ頓狂に叫んでしまったジェイスに、クレメントはまたも「ええ」と笑う。
「あり得ねえ……。実の母親だろーがっ！」
「まあ、そうですねえ。けれど母上は病弱で、僕は一緒に住んでいませんでしたので」
それは、王侯貴族ではよくある事だ。嫡男は特に、跡継ぎとして特別な教育を受けさせられるため、早くから教育係がついて独立させる。
母親が病身であれば、尚更、早く手元から引き離してしまう。
が、それにしても、産みの母との会話が年に四、五回というのは、ちょっと少な過ぎる気がする。
「儀式や国賓がいらした時には、もちろん顔を合わせましたし話もしました」
「そりゃ、そーだろうけどさ」
「基本的に、先程のジェイスの言葉ではないですが、母上は、興味を持った物事に、何でも固執する僕の性格がお好きでなかったようですし」
「それは、俺は……」
五日も前の些細な出来事を気にしていたのに驚いただけで、別に、クレメントの性格は嫌いではない。
いや、むしろ、気に掛けてくれていたのは、もしかしてクレメントも自分に興味を持っていてくれたのかと思い、とても嬉しい。
言い掛けて、だがジェイスはその先は止めた。
「どうかしました？」
試すようなクレメントの眼差しに、ジェイスは少し赤くなって「いや」と横を向いた。

9（後書き）

ジェイス・・・厨ボーか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8353v/

地下迷宮の女神

2011年11月22日01時58分発行